

# 史料館報

第 56 号

平成 4 年 3 月

## 四十周年記念祝賀会

### 開催される

昭和二十六年五月に文部省史料館が発足してから四十周年にあたるので、それを記念して平成三年十二月七日(土)、史料館四十周年記念祝賀会が開催された。

史料館評議員会副会長  
児玉幸多氏

挨拶・祝辞・記念講演については、要約を本誌に掲載する。  
来賓紹介  
史料館の現状と記念出版の紹介

第一部 国文学研究資料館大会議室を会場として、午後一時三十分公開会し、祝辞と記念講演会。

挨拶 国文学研究資料館長・史料館長事務取扱 小山弘志  
祝辞 文部省学術情報課長

東京大学名誉教授 鷗野英彦氏  
元史料館評議員 古島敏雄氏

記念講演「史料調査の思い出」  
学習院大学名誉教授

記念出版として『史料館の歩み四十年』を当日配布し、年度末刊行予定の『近世・近代史料目録総覧』についての紹介があった。

第二部 史料館の現状と活動を紹介する意味で展示見学をしていただいた。  
史料館閲覧室では、史料館の出版物として史料目録・史料館叢書・研究紀要などを配列し、断裁史料の復

元として、高島藩宗門改帳の断裁状況からその復元過程の史料を配列した。そのほか、大型絵図の複製、採色史料の複製、高利用頻度史料の複製、保存用具のいろいろの展示を行った。

第三部 祝宴は、国文学研究資料館大会議室に会場をふたたび移して行ったが、和気あいあいの内に歓談を尽くしていただいた。祝辞を次の方々からいただいた。

市古貞次氏  
元国文学研究資料館長  
高島正人氏  
日本歴史学協会会長

関根敬一郎氏  
全国歴史資料保存利用連絡協議会会長

|                                      |          |
|--------------------------------------|----------|
| 四十周年記念祝賀会開催される………                    | (1)      |
| 記念講演「史料調査の思い出」………                    | 児玉幸多(7)  |
| 史料館創立四十周年記念出版「近世・近代史料目録総覧」の刊行について……… | 山田哲好(12) |
| 講師による史料管理学研修会検討会………                  | (13)     |
| 開催………                                |          |
| 前内家文書の整理を終えて………                      | 渡邊尚志(14) |
| 古沢家文書目録(その一)の編集を終えて………               | 丑木幸男(15) |
| 史料所在調査報告………                          | (16)     |
| 新取史料紹介………                            | (19)     |
| 受贈図書………                              | (26)     |
| 集報………                                | (19)     |

ついで、岡野澄氏(旧史料館長)の乾杯の後、引き続き次の方々から祝辞をいただいた。  
大石恰子氏 旧職員  
佐藤友之氏  
史料寄贈・寄託者代表

中田易直氏 研究者代表  
創立当時の貧しかった時期の状況やら、さまざまな出来事の裏話の紹介などがあり、なごやかな雰囲気の中、祝宴が行われた。史料館では情報・閲覧サービス機能、研究機能、研修・教育機能を三本柱にして活動を展開していることの紹介に対して、三本といわず十本でも柱を立てたほうがいいと、史料館に対する激励もあった。

創立以来の体験談をまじえた当館教授鶴岡実枝子の閉会の辞で、午後五時盛大に開かれた四十周年記念祝賀会は、閉会した。  
出席者は文部省二名、評議員・運

# 四十周年記念祝賀会

## 出席者 (敬称略)

菅協議員・功労者九名、史料寄贈・寄託・マイクロ収集史料提供者一三名、日本歴史学協会関係者一名、類縁機関七名、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史料協)一四名、地方史研究協議会関係二〇名、史料管理学研修会講師など二一名、旧職員一五名、国文学研究資料館二名、合計一三四名、史料館員等を含めると一六〇名であった。

年末のご多忙のなか、ご出席いただいた方々を始め、準備段階からご協力いただいた国文学研究資料館管理部のみなさまに感謝をするとともに、今後のご支援・ご協力をお願いしたい。



史料館の現状と記念出版の紹介をする森教授

### 文部省

鳴野英彦 文部省学術情報課長  
井上明夫 文部省学術情報課長  
図書館係長

### 評議員

児玉幸多・秀村選三・尾藤正英・宮川満

### 運営協議員 (館外)

大口勇次郎

### 功労者

市古貞次・津田秀夫・中田易直・古島敏雄

### 史料寄贈者

佐藤友之・依田泰八・山田すみ  
史料寄託者

飯村晃彦・板倉勝宏・岡谷繁弘・真田幸俊・久松博芳・松浦一雄  
マイクロ収集史料提供者

折橋禮一・坂井永一・佐藤邦明・佐藤芳寿

### 日本歴史学協会関係

有元修一・加藤幸三郎・片倉比佐子・北原進・佐々木潤之介・高木俊輔・高島正人・高島緑雄・松本四郎・三上昭美・吉原健一郎

### 類縁機関

小森正明 宮内庁書陵部  
杉田繁治 国立民族学博物館

塚本学 国立歴史民俗博物館  
中西進 国際日本文化研究センター

広瀬順皓 国立国会図書館憲政資料室

益田宗 東京大学史料編纂所  
河原由治 法政大学大原社会問題研究所

全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関係 (機関)

加藤三紀 愛知県公文書館  
小柴俊雄 神奈川県立文化資料館  
磯貝福七 群馬県立文書館  
関根敬一郎 埼玉県立文書館  
渡辺利一 栃木県立文書館  
一原敏恵 千葉県文書館

福本紀美子 徳島県立文書館  
萩原英夫 東京都公文書館  
菅田宏 福島県歴史資料館  
高野修 藤沢市文書館  
青山英幸 北海道立文書館  
鈴木邦男 大和市史編さん室

同 (個人)

小川千代子 佐久間好雄  
地方史研究協議会委員・史料調査員

奥田晴樹・門前博之・久保田昌希・高橋実・所理喜夫・西垣晴次・馬場憲一・廣瀬良弘・松尾正人・松尾美恵子・水口政次・水野保

村上直・盛田稔・山口啓二・山田忠雄・湯浅隆・吉田優・渡邊一郎・渡辺則文

史料管理学研修会講師

井上如・上島有・太田富康・小川雄次郎・小泉和子・古閑豊・坂本勇・高山正也・竹澤哲夫・玉井哲雄・戸島昭・仲田凱男・白田勝美・原由美子・増田勝彦・松田芳郎

科研共同研究者

佐藤正広  
史料館報寄稿者  
佐藤勝巳・三浦俊明

史料館業務協力者  
欄木寿男 (三省堂)

内地留学者  
丹羽邦男

旧職員  
相京眞澄・秋山健・荒井知子・泉谷弘幸・槐礼一郎・大石怜子・大内登・大野瑞男・岡野澄・五味三代子・鈴木陽子・西村瑞夫・原島陽一・安澤秀一・吉永昭

国文学研究資料館

小山弘志・六車正章・樹下文隆・新井栄蔵・武井協三・松村雄二・原正一郎・本田康雄・益田義孝・歌野博・山田直子・松岡憲雄・正木忠夫・長津昭・竹之内重雄・平野栄三

杉村聖治・小林芳夫・千葉勝志・黒瀧裕・目鳥繁行・小関仁志

# 史料館四十周年記念祝賀会挨拶

本年は史料館発足後四十年という年にあたりますので、いささか記念のことを計画実行しておりますが、本日ここにささやかながら記念の会を催すことにいたしましたところ、来賓各位、また関係の方々、旧職員の皆様には、御多用の中をおさしくりいただき、多数おいで下さいまして、まことにありがたく、あつく御礼申し上げます。

戦後の混乱期において、主として近世以降の文学・記録類は、そのままにしておくかと散逸消滅するものも少なくないという情勢でございました。これを憂慮した有識者たちの尽力によって、戦後まもなくの昭和二十二年ごろより、これらを収集・保存するという仕事が文部省において始められ、今から四十年前の昭和二十六年五月に、文部省史料館が正式に設置されたのであります。

以後、引続き、史料の収集・整理・保存・閲覧サービスの業務を続けておりますが、昭和四十七年五月、国文学研究資料館が大学共同利用機関として創立された際に、その組織に組み入れられました。

昭和四十年代よりは、史料の現地保存の機運が高まりました。そのため、マイクロフィルムによる収集を主とするようになりましたが、すでに蓄積している史料は約五十万点であります。毎年、「所蔵史料目録」として整理刊行して、既刊五十四集、本年度末で五十七集に達する予定でありますけれども、まだ多数の史料が残されており、このような目録の刊行が終わるのには、なお多くの歳月を要すること存じます。それは別に、まとまった史料全文の翻刻も行っており、これは「史料館叢書」として東京大学出版会より十一冊刊行しております。

各地に所在する近世・近代史料は、おびただしい数にのほります。昭和六十年代より科学研究費補助金の交付を受けてこれらの所在情報を収集・整理し、学界に提供することを心がけておりますが、その成果の一つとして『近世・近代史料目録総覧』を記念すべき本年度において三省堂より刊行することになっております。

次に早くも開館の翌年、昭和二十七年より「近世史料取扱講習会」を

毎年開催して参りましたが、これを昭和六十三年度より「史料管理学研修会」と改称して、引き続き開催しております。このことは、各地に史料館・文書館等の新設が相次ぎ、また昭和六十二年に公文書館法が制定され、史料を取扱う専門職員の必要が増大したことに対応するもので、

従来の短期研修に加えて長期研修も実施し、内容も、近現代の公文書をも対象とすることにして、記録・史料全般の整理・保存・利用に関する幅広い専門的知識と技法とを、修得する機会にしたものであります。講師として多くの館外者の御協力を得て、いわゆるアーキビスト養成に努めております。なお、「史料の整理と管理」を館員が共同して執筆、昭和六十三年に岩波書店より刊行いたしました。

以上、業務について申し上げますが、これは研究者が携わらねばできない仕事であります。一方、研究者には、狭い意味の業務のほかに研究という仕事があります。業務と各自の研究対象とが必ずしも密接に関連するとは限りません。館員の教官は業務と研究とを両立させ、紀要その他の学術雑誌に各自の研究を発表して参りました。「史料館研究紀要」

は昭和四十三年に第一号を刊行して以来、現在、第二十二号まで出しております。

史料館の四十年は、形の上ではほぼ二十年づつ、前期が文部省史料館、後期がそれ以後であります。一貫して当初の業務を続けるとともに、時代に即応しつつ発展拡充して参りました。昭和五十七年三月、史料館長榎本宗次教授が急逝され、市古貞次国文学研究資料館長が史料館長事務取扱となられ、私はそれを受け継いで、現在に至りました。

私どもの仕事は、地味な仕事であります。毎日毎日これを続けて、十年、二十年、三十年と積み重ねることによって、文化遺産を後代に伝え、また着々と広く学界のお役に立つものになっていっていると存じます。

「史料館の歩み 四十年」という小冊子をお手元に差し上げましたが、さらなる発展を旨として館員一同努力して参る所存でございますので、皆様の一層の御支援をお願い申し上げます。

簡単にございますが、これをもって挨拶のことばといたします。

平成三年十二月七日

国文学研究資料館長  
史料館長事務取扱

小山 弘志

# 祝 辞

文部省学術情報課長

鳴 野 英 彦

ただいま御紹介いただきました、学術情報課長の鳴野でございます。本日は史料館開館四十周年、本当におめでとうございます。

史料館は大学共同利用機関といまして近世・近代の史料収集・保存・情報提供サービス、あるいは史料学等の研究に多大な貢献をいたしてまいりました。これまでの関係各

位の御努力に深甚の敬意を表する次第でございます。

さて、史料館と申しますと、他の組織と違ひまして、私ども文部省とい入れがでございます。今から二十年前までは、史料館はわが文部省の直轄機関でございまして、いわば娘のようなものであったわけございま

す。その娘が成人式を迎えますと同時に、国文学研究資料館の方に嫁がれたようなものでございますが、以来今日までさまざまなことがございまして、なかには国文学研究資料館と史料館の仲を裂こうという、いわば離婚をせまられるような時期もあったわけでございます。それをよく乗り越えて、今日まで国文学研究資料館の擁護のもと、着実に発展し独自の活躍をしておりますことは、まことに御同慶に堪えません。

今日、史料館をめぐっては、様々の課題、問題が存在しております。いま思いつくものを挙げるだけでも、たとえば史料所在情報のデータベースの構築の問題、あるいはアーキビスト養成・支援の問題、さらには立川への移転問題等々、まさに山積しているといつて過言ではありません。

史料館ではこの度、四十周年を迎えるわけでございますが、それを人間にたとえれば、不惑の年を迎えたといつてもいいと思います。これを契機にいたしまして、文字どおり惑う事なく、着実に前進されますことを、心から祈念申し上げます。

以上、はなはだ簡単ではございますが、お祝いの言葉とさせていただきます。



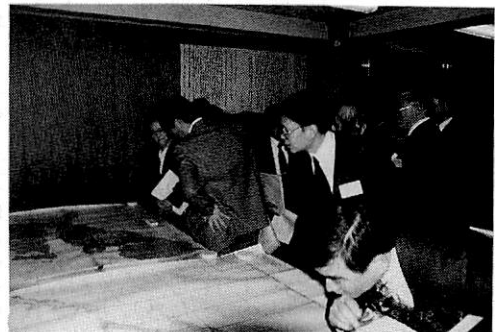
小山弘志館長



鳴野英彦氏



祝宴での歓談



展示見学

# 祝 辞

東京大学名誉教授  
元史料館評議員

古 島 敏 雄

実は森（当館教授）さんから祝辞と言われまして、早い時期から関係していて、しかも子供を育てる親のように努力をしなければならず、誕生日おめでとう、そういうことを申し上げられるのかと迷いましたが、私のおしゃべりが祝辞になるかどうかは御適当に判断してください、お願いいたします。



古 島 敏 雄 氏

森さんのお電話をいただきまして、自分の履歴書の写しを出したり、辞令を引っ張り出して見ました。実は学術史料調査委員を命ずるといってもが文部省から出ているのですが、それが何なのか、どうしても分らなくて、結局二十六年六月十日付けの史料館の評議員の、その時からの関係のように思いました。私の三十九才の時です。昭和六十三年に評議員を止めさせていただきましたが、三十八年間になり、私の八十という年からみても私の半生のお付き合いということになるし、大変なことなのかという思いを新たにしております。

夫さんだとか、野村兼太郎さんだとか、戦後幣原内閣の大蔵大臣をやらされた渋沢敬三さん、政治的な面ではなくてアッチク・ミュージアム（後の日本常民文化研究所）を創設されて多くの業績を出してこられました。が、そういう方々が、中心となって動いて下さいました。史料館としてできあがったのが文部省の、当時の大学事務局の内部組織にとどまった。これは私たち評議員が何とかしなくてはならないという思いをたえずもちながら、本業に追われて思うようにできなかった。それと戦前からの大学の先生方の、政治的あるいは、官庁に対する関係の点で、違いがあるんだらうなと思うんですが、官庁への運動を進めるのが苦手な方が多かったように思います。従って文部省の一局の下に属する小さな研究所にとどまり、ポストを確保することができないので、若くてここにつとめて下さった方たちの待遇の上でも大変難しいことがあったのではないかと、いま思い起こしています。

村方の史料を本当に丹念に分析した人というものは、私どもの時にはほとんどなかったわけです。そういう状態で戦後日本の研究の中で、若い人たちが集まってきて、その方たちもいまは定年でやめていかれる、あるいは近く定年をむかえられるという時期にきているわけですが、そこではじめて広く村方の史料・町方の史料を、うぶな形で研究者ががける、という形がはじまったのであります。その試みの一つとしてあとで児玉さんがお話して下さいる調査の計画もあったのですが、そういうことをやって若い研究者を育てるといことが、一つの義務でありました。それと同時に今日お集まり下さった方々のなかにもおいでですが、地方調査員の制度によって各地の史料の所在状況を調査すること、それももう一つは、史料を収集することが大きな仕事でした。それは戦後、農地改革によって農村文書がなくなってしまうことが多かった。文書の管理者は旧地主が多いもんですから、急速に散逸してしまつた。私もちょっと史料あきりをよくやった方なんです。小野武夫さん、野村兼太郎さんなど先輩方には私よりはるかに強い危機感があったと思うんです。そのために史料館もみずから史料を買い取っていくという努力、公式には地方調査員による目録の作成、そして史料の買い取り制ということで出されたのです。

あれは四十周年誌には書いてあるんでしようが、私自身の履歴書の中にも、史料館史料購入価格評価委員会という、会の委員に任命するなどというのが入っていることに気がついたんですが、史料の購入は学界に大きなショックを与えたんです。東京へ全部集めてしまふ、現地に置いておかなければ周辺との関連などが読み取ることができない史料が、東京にあるとはなんたることかということで、所三男さんなども動いた地方史研究協議会はもちろん、歴史学研究会その他で強い反対の声が出てきたわけですね。予算はつましい、反対は強いというなかで、身のせまい思いをしていたわけです。そのことがあって反対を唱えて下さった方たちが、各地での史料収集保存を考えて下さったり、自治体によっては古文書館の建設などの動きも出てきた。そういうものを作って下さった。そういう意味で一つ、史料に目を向けさせる効果があった。これも功績の一つだろうと思います。逆にあの史料収集を馬鹿なことをやったということだけではなく、史料が大切にされはじめた、そんな風にも考えていいのではないかと思えます。

そう思ってきましたと、今日私の頃の史料解説の講習が、アーキビストの養成の講習に変わってきたことは、その間にもう一つ公文書館法の成立があるので、そういうったものが出てきて、すくなくとも各地に何とかしなくちゃならないという思いが強くなり、そこで働く人たちにしっかりと基礎的な教育をするべきだということになったと思います。このことは一番の成果だといえると思えます。ま、ヤブをつついてへびではなく、新しい動きがでた。史料館で古文書を購入したので、各地に古文書館ができた、さらに、法律ができたということ、それに対応するための仕事を史料館自身が始めたことが、四十年の到達点なのだと思います。その発展段階で四十年を迎えられたということ、これは大変おめでたいことと思っているわけです。実はこれでおしまいなんです、もう少し申し上げておきたいことがあります。

分は、現代の経済学を扱う人、あるいは政治学を扱う人だけでは、やっていけない。自治体に関する法律が変わるたびに、できる史料の形が変わっていきます。明治三、四十年ごろから昭和のはじめまで、町村会へ提出した決算報告書についている町村事務報告、これのできのいいものは、それによってかなり細かく、その地域の歴史のアウトラインがつかめます。そこから手をのばす手がかりになります、事務報告書はほとんど使われておりません。それが戦後の町村制に関する地方自治法の成立によってなくなりました。そしてそこでは財政状態だけについての報告を、自治体の決算議会に出すようになっております。これがいつなくなってきたのか、最近には見あたらないようです。それによってもやはり地域の大きな流れがつかめる、しかしそれが使えると思っている人がほとんどいないんじゃないか。そういう現場で仕事をやる上にあたって手がかりになる史料の特質を確かめる仕事が必要だと思います。これから出てくる公文書館は、町村制以後の自治体のもを中心に扱うことになるわけだと思いますから、法律の本来の趣旨はそういうこと

だと思えます。しかし、それを重くみることができるような、従って館内に現代までをふくめた専門家を育てる努力をしていただきたいと言、今後の活動について申し上げて、そしてとにかく四十年という切れ目に、大きく視野を広げて自分たちの活躍する道を見いだしている現在の所員の方に敬意を表し、お祝いの言葉にかえさせていただきたいと思えます。

どうも長いことおしゃべりをさせていただきますました。

週休二日制について  
すでに新聞等で報道されておりますように、政府は平成四年度の早い時期に、国家公務員の完全週休二日制を実施する予定です。

これまで当館では、職員の交替制勤務によって、土曜日(午前中)の開館の維持に努めて参りましたが、今回の完全週休二日制が実施された場合には土曜日を閉館とする予定です。その場合、平日の開館時間を延長する等の措置を併せて検討しておりますので、皆様の御理解を賜りますようお願い申し上げます。

なお、国文学関係の開館につきましても、同様に土曜日の閉館と平日の開館時間の延長等を検討しておりますことを申し添えます。

## 記念講演

# 『史料調査の思い出』

学習院大学名誉教授

国文学研究員資料館評議員会副会長

児玉 幸多

### 学生時代の史料調査

(拍手)

簡単に申し上げることにしますが、私など学生時代には当時の大学、少なくとも東京大学では、江戸時代の地方史料というものがありませんでしたから、私自身は卒業論文では戦国時代の終わりから近世のはじめのことを扱っていましたが、もっぱら史料編纂所の影写本を使ったわけがあります。

史料編纂所の影写本というのは、何々文書、例えば児玉文書と書いてあるだけで、なかに何が入ってあるかわからないので、大体見当をつけて、その中には、なんかありそうだとするようなのを毎日五・六種類ずつ借り出しては読んで、卒業論文を書いた記憶があります。

### 日本林制史資料の編纂

その後、大学を出て農林省に入りました。農林省では大正の終わりが

ら「日本林制史資料」という、山林制度の史料集を出しておりました。幕領・諸藩領・社寺領などに分けて併せて三〇冊といった大きな叢書でありました。その編纂の委員のひとり鳥羽正雄さんが、当時官立であ

った神宮皇学館に、赴任されることになったので、そのあとがまのような形でそこに入りました。鳥羽さんは一年たつてから行かれましたから鳥羽さんから色々と教えていただいたのであります。編纂委員は私を含めて四人になりました。農林省は当時いま申した、林制史資料編纂のために全国から膨大な史料を集めてきたわけでございます。当時の諸官庁は大手町にありましたが、震災後のバラック建てでありました。そこに一杯史料が積み上げてありました。そこで初めてそういうなまの史料に直接接して、そして自由に、そのなかから適当な史料を選択し、編集して、印刷に出すということに関係

したわけでありました。当時は筆耕者といえますか、その原物を写す人がいたのですが、それらの人たちは多分昔の高等小学校を出たくらいか、せいぜい中学校を出たような人ですけれども、年輩の人たちで、昔の史料を自由に読みこなすことができずした。それはカーボン紙を入れて同じものを三部作ったのですが、その内の一部を切り張りしたりして、編纂に使いました。あと二部残っています。これは戦後、一部は東京大学に、一部は徳川林政史研究所に移管して、そこに保存されております。その筆耕の人の写した原稿というのは、これまた非常に達筆です。一枚について幾らというのですから非常に早く書いてあるわけですが、それを当時の印刷局に持っていくと、その職工さんたちがそれをまたみな読むわけです。今の大学の史学科の学生よりは当時の植字工の方が読めたんじゃないか。(笑)

### 林制史の史料調査

農林省のそういう中にいたことの外に出張して、史料収集に出かけたことがあります。ひとつは飛騨に史料調査に出かけました。飛騨郡代のいた高山へ出かけたわけです。その

際、ついでに当時有名だった白川村にいきました。白川村を主として研究する人は、民俗学の方が多く、こゝに高山で「ひだびと」という雑誌を出していた、江馬三枝子さんなどが、いくつかの本を出されておりました。民俗的などというのは白川村では大体、次・三男が、正式な結婚をしないので、女性の家に通って行きました。いまでいう内縁関係の様な形で生まれた子供は、生まれた家におりますから、二十人・三十人の家族は珍しくない。ことに明治の終わりになると四十人・五十人というような家族がありましたから、それらについては、民俗学の人も興味を持っていて、中には、奈良時代の戸籍を見ると百人も何十人もという戸籍があるので、奈良時代の遺制であるというような意見などもあったわけがあります。

それらに対抗するわけではないが、歴史家として、やはり、文献から調べなくてはならないというようなことで、わずかな期間でありましたけれども白川村のなから、すこしの史料を発掘しました。それから、飛騨の代官所の史料は岐阜の県庁の地下の書庫に移されておりましたから、そこへ行って、それらの中から白川

村のある村の差出明細帳というのを  
出して、当時の人口を割り出してみ  
た。それらをもとにいろんな条件を  
述べて論じたことがあります。

もう、一つは、林制史資料の中に  
社寺編という神社・寺院関係があり  
まして、その史料を調査するために  
上賀茂神社にいったのですが、上賀  
茂には寛文四年からの日記がずっと  
残っています。毎日書いている。天  
候も全部書いておられます。それら  
の中で興味を引いたのは往来という言  
葉であります。往来という言葉が絶  
えず出てくる。それに興味を持って



児玉幸多氏

調べてみると、往来田という土地の  
制度があった。全部で一四〇人分あ  
るのですが、それが年齢順に給与さ  
れ、そのもらっていた人がなくなる  
と神社に返して、次の年齢の人がも  
らう、それでその社家と神社の間を  
往来するので往来田という説と、  
その証書というようなものが巻物に  
なっていて、その軸が往来軸である  
からという説もあります。大体鎌倉  
時代からその制度ができてきている  
のですが、そういうもので上賀茂神  
社のことに興味を持つきっかけにな  
りまして、それに大分ひっかかった  
時期があります。

史料調査に当時まだ大学生であつ  
た松本新八郎君に、ひと月くらい手  
伝ってもらったことがあります。そ  
れらの中で享保年間に社家が図書館  
を作ったこともありました。その図  
書館は三手文庫といえます。それは  
社家が東手・中手・西手という三つ  
の区画に分かれて住んでおりました  
から、それぞれの東手・西手という  
集会もあるけれど、あわせると三手  
集会という会議体になります。三手  
ということばがはいっているわけで  
す。その中に賀茂清茂という人が中  
心になって図書館というか、書庫を  
作ろうと、江戸などに出てきたりし

て、お金を集めると、三手文庫につ  
ぎ込みました。本日、三手文庫は、  
国文学関係の方はご存じだと思います  
が、契沖の弟子の今井似閑が契沖の  
手沢本を集めて、自分の蔵書は三手  
文庫に寄進するという遺書を書いて  
いるのであります。その献納目録と  
いうのは、今、写本になったものが  
いくつも残っております。それが、  
明治になりましたから、その社家の  
がなくなりましてから、その社家の  
持っていた、三手文庫の史料、その  
他がぜんぶ神社のものになりました。  
現在は神社の境内にある校倉の中に  
納められていて、しばしば、今の校  
倉が三手文庫と間違えられるような  
ことであります。三手文庫は境内  
の外にありましたが、いまは跡かた  
もありません。校倉には三手文庫の  
もののほか、先ほど申しました日記  
などがたくさんあります。いずれに  
しましても、そのことで少し道草を  
くった時期があります。

#### 鹿児島県庁の史料調査

それから、鹿児島県の第七高等学校  
の教師になって昭和九年から四年間  
ほどいておりましたが、たまたま  
鹿児島県史の編纂があつて、その手  
伝いをするようになりました。その

ために、県内のいろいろな所をまわ  
ったのですが、同時に、また、県庁  
の中に入って、その書庫の史料を自  
由にみる機会を与えられまして、部  
屋の一室のところへ机と腰掛けを持  
ちこみまして、勝手に見せてもらう  
というようなことをしたわけです。  
そのところで、すこし興味をもった  
のは、明治になって町村制がしかれ  
る時の史料でした。鹿児島では麓と  
いう集落があつて、そこにいる郷土  
が中心になって、その支配をして  
いました。まわりに農民とかあるい  
は漁民とかいう人たちは別に集落を  
作っていたわけです。それで今日で  
も鹿児島県および宮崎県南部には麓  
という地名が残っています。

明治二十二年の町村制は、戸数五  
〇〇戸から三〇〇戸という標準で、  
それまでのいくつかの村を集めて合  
併したのです。鹿児島はそういうこ  
の麓、また郷とも、あるいは外城と  
もいいましたが、その外城の組織を  
くずすわけにはいかないというので、  
外城そのものを村にしましたから、  
古い体制がそのまま残っていました。  
僕が鹿児島に行ったのは昭和九年で  
すが、昭和十年に国勢調査がありま  
して、一町村の人口が全国平均では  
四千人少しのところ、鹿児島では一



万人余で全国平均の二倍半ぐらいでした。そういう町村制で特別な制度が鹿児島で行われていたということも、県庁のなかの史料で見つけたのです。戦後の昭和二十八年の町村合併促進法というのでも八千人というのが目標でした。実際にはそれ以上の町村が合併しましたが、鹿児島の場合は、そのままの体制が続き、郡の中に町村が三つか四つくらいしかないという所もある、そういう状態が今日まで続いております。それが、鹿児島県の大きな特徴なわけです。

先ほど申した岐阜県の県庁の史料のなかには、明治初年の村明細帳というのが、これがまた非常にたくさんありました。これを借りてきて、ひとつ分析しようというのを考えて借り出しました。個人の名前で借り出すことはできないから、学習院の名前で借りて人をやとって複写してもらったんですが、それは戦争が激しくなりましたから返却したので写したのは一部だけでした。

なお、長野県の県庁にもいきましたけれど、ここにも史料が非常にありました。今日、各県で県史、あるいは市町村史をやっているのですが、都道府県にどれだけの史料があるか、

ということが非常に大きな問題であろうかと思っております。ただし、今度の戦争で焼けてしまったのが、たくさんあります。鹿児島の方もまったく何にも残らなくて惜しい限りでありますけれども、そういう県がいくつもありました。

いづれにしても、県庁などにあつた文書というの、色んな形で将来利用する機会があらうかと思えます。東京都の場合は公文書館というのがあつて、公文書の保存についていろいろな行政的な指導をしておりますから、東京都内の区、市町村に関係あるそういう文書というものに、我々が目をつけるようになりました。

#### 社会経済史学会での調査

それから、ほかのことになります。社会経済史学会が昭和十九年に松山で開かれました。古島(敏雄)さんもいかれたのですが、このときの主要なテーマは「清良記」、日本最古の農書が展示されたので出かけたわけです。ところが台風で列車が不通になってしまった。その影響で大会は一日だけになって、狭い教室で研究発表が行われている、それを聞きながら、その史料の廻し読みをしました。その結果として『社会経

済史学』に古島さんや入交(好脩)さん、それに私などが、それぞれの論文を発表しました。(『社会経済史学』第十三巻第十号、昭和十九年一月発行に児玉幸多氏「清良記に関する新資料の発見」、古島敏雄氏「清良記」成立年代についての一考察)、入交好脩氏「清良記採訪雑記」が掲載されている。)入交さんはあつて、『清良記』をまとめてくださいました。学会というものが、我々の史料調査にも役立つと思うわけがあります。

#### 中山道追分宿の史料調査

戦後になりました、長野県の市川雄一郎という方で地方の郷土史家としてよくやっておられ、戦争中からも知っていたわけですが、戦後になつて一緒に調査をしました。たまたま市川さんの親類に今の佐久市ですかね、当時の野沢町の旧原村というところの村方入用帳という、昔の村の経済を書いた帳面がたくさんあります。それを利用して論文を書いたわけでありまして、その村の経済をみてみると、支出の方で、いちばん大きいのは、宿場の助郷の経費でして、六割、七割というような支出を示しております。そこで、どうして

も宿場のことをやらないと、助郷のことは解らない。幸いなことに、中山道の旧追分宿に旧脇本陣の油屋というのがあります、これは今も旅館をやっておりますが、その旅館に泊まつて、隣りの問屋本陣であつた土屋家から史料を借りてきては写すというようなことを続けたわけですが、当時は写真でパチパチとるわけにはいかないうから、はじから筆写をするというようないことがありました。冬になると寒いので、こたつの中に手を入れてあためて筆写をするというようないことでした。

#### 通信博物館の調査

それから、交通の方に興味をもちまして、史料が現在の通信総合博物館、前には通信博物館といつて、飯田橋駅のななめ向かいのところ、飯田橋駅がなくなりましたが、そこに史料があつたわけですね。日本交通史がはじまつたのは明治十年代でした。『駅通志稿』(『大日本帝国驛遞史稿』) 駅通局長前島密の命により青江秀が編纂)というのが出来て、後に『大日本交通史』という名前に変えて復刻もされております。そこに使った史料が通信博物館の史料でして、それを借りてきて、当時は何百

頁もの資料を、何十メートルものフィルムで写すマイクロ撮影機という機械は、この文部省史料館にしかありませんでしたから、史料館にもってきてここで写してもらったわけです。小川富史君という嘱託がフィルムで写して焼き付けもしてくれて、何百枚も現像してたらいのなかで水洗いをしてくれました。この人は史料館をやめて、立川市の収入役をついこのあいだやめましたけれど、その人のおかげで通信博物館の史料の最初の部分は写真撮影をすることができました。ところがいまは大手町の方へ通信総合博物館として非常に立派な建物になっていのですが、現在では史料を自由に見ることは困難になっている。もちろん借り出すことはできない。建物が立派になると利用しにくくなるという皮肉な結果になっています。

### 松浦史料博物館の史料

史料というのは、行ってみなければ判らないというところがたくさんあります。戦後、長崎県の諫早領について調査をしたことがあります。諫早という町に行つて大量の史料を見せられました。ここでは、助手を使って撮影などもしました。そ

のときに、平戸にも行ってみました。平戸には松浦史料博物館というのがあって、殿様の屋敷跡を使って史料館にしているのですが、そこにはいろんな品物が陳列してありますけれども、同時にまた史料も持っています。その史料の目録をみているうちに、面白い題名のものがあったので、その史料を借りだしました。これはちょうど、田沼時代の史料で、松浦静山が田沼氏に対していかに贈りものをするかというようなことが詳しく書いてありました。江戸に腹心の家臣を置いてあり、その時は殿様は平戸におりましたが、その江戸と平戸とを往復した文書綴でした。田沼については功罪半ばする文献がありますけれど、少なくとも史料には賄賂を送ったことは間違いないことがはっきり書いてある。

ただし、その史料は、どうしてか最初の二枚ぐらいが切つてあるのですね。鋭利なもので切つてあるから、ちよつと見ただけでは判らない。文章が統かないので、切つてあることは判る。よく見ると切口がある。私はその後、この史料を使って、大名について書いたものがありますけれど(『大名』日本の歴史一八、小学館、一九七五年)、その本の書名を

わざわざ書かないでおきました。松浦史料博物館の閲覧も最近是非常にきびしくなりましたので、簡単に切るという心配はないと思うのですけれど、そういう史料の利用の仕方、そういう点に対して、どういう対応をするかなどというようなことについても、色々注意しなければならぬと思います。

### 近世庶民史料所在調査

なお、この史料館につきましては、先ほど古島さんのお話がありました。史料館のできる少し前に、『近世庶民史料所在目録』というのを作つたのです。それは全国を六つの地区に分けて、それぞれゆかりのありそうな所の調査を、当時の地方の郷土史家に依頼してやりましたが、私は中部地区を担当しました。長野県に對しましては、先ほどの市川(雄一郎)さんにもお願いしました。また、つい今年になってから、群馬県の都丸九一さんに会いましたら、都丸さんにも頼んで史料の目録を作ってもらつた、その礼状とお金をいくらか、二千元か三千元ぐらいだと思ひますが、それを送るからということで、私の出した手紙を、まだ保存している、ということ聞きまし

た。そういうふうにならなければ、ある人たちに依頼して、その史料調査をしたのです。

そのほか直接ではないけれども、そういう調査に関係した人たちで研究会を作つて、この史料館への側面協力のために文部省の科学研究費をもらつて、各地の史料調査に出かけたことがあります。信州の大町近くだとか、あるいは金沢、岡山県とか宮城県であるとか、岐阜県、あるいは遠く熊本県・島根県、あるいは徳島県から高知県など、また和歌山県というふうな、たびたび送られて来る史料調査の所在目録を確かめるためにも、現地に行つたのです。そういう具合にして各地の史料調査をやりました。史料館を少し前にやめた藤村(潤一郎)さんなんか、多分学生であつたのに高知県では手伝つてもらいました。

この研究会は所三男・宝月圭吾・高村象平・豊田武・中井信彦・和歌森太郎など、多くの方が参加されて、調査結果としては『近世村落自治史料集』二冊などを出しました。しかし、多くの方がなくなつて、今は石井良助さん入交好脩さん、今日御出席の古島さん、それといつも事務局担当で、今年この史料館を退職さ

れた浅井潤子さんなど、僅かな人になつてしまいました。

### 史料保存問題と史料館

色んな形での調査が、個人としての調査ということもあるし、それから団体としての調査ということもある。しかし、調査というのは、場合によっては大変困難な場合があつて、簡単には見せてもらえないときがあります。

終戦直後、紙くず屋が旧家から史料をトラック一台分を買つて持つていったという話もあります。終戦直後に、紙が、つまり古い史料が散逸しました。そして、古島さんが言われたように史料を持つていた人が財産を失つたということもありますけれど、同時にまた古いものを持つていてもしょうがないんだという、そういう価値観の大きな変遷というものがありません。それを食い止めようというのが、史料館を作るきっかけになつたのであります。そして今でも必ずしも解決されたのではなく、こういう問題がいくつか起きています。

そのためにはどういうようにして、史料保存に力を尽くすかというようなことが、お集まりのみなさん、各

地で活躍されておられると思うのですが、いろんな方法で、史料の重要性と保存について力を尽くしていただきたいと思ひます。

ご静聴ありがとうございます。  
(拍手)

(当日の録音テープから要約した。  
見出しおよび( )内は編集担当で付した。)

## 史料館創立四十周年記念出版

### 『近世・近代史料目録総覧』

史料館で所蔵する日本近世・近代史料、郷土資料、行政資料に関する目録を北は北海道から南は沖縄県まで完全収録した最大規模の史料目録集  
◎史料所在情報の基礎である史料目録類をはじめとする文献情報の集約作業は、全国的な規模では行われておらず、本書が初めての企画です。

◎史料館では一九七〇年から本格的な史料所在情報の集約作業を継続。二十年にわたる調査・収集活動の成果です。

国文学研究資料館史料館編

B5判・四六八ページ

上製本(函入り)

三省堂発行

九〇〇〇円

## 史料館創立四十周年記念出版

# 『近世・近代史料目録総覧』の刊行について

山田 哲好

史料館は戦後間もない昭和二六年に創立以来、四十年を迎えた。それを記念して標記の出版物を刊行することになったので、以下にその概要を報告する。

史料館で史料所在情報の調査・収集を本格的に開始したのは昭和四五年からで、主として「既調査に属する史(資)料目録類」に関する全国的な調査・収集を二十年以上継続して現在に至っている。その中間報告として昭和五五年三月に「史料館所蔵目録一覧〔近世史料・郷土資料の部〕」(約一、〇五〇タイトル、二、一〇〇冊収録)を刊行した。本書はその後の増加と文部省科学研究費補助金によるプロジェクト(二件)による成果をも含めて、「一覧」の増補改訂版として刊行することにした。

の史料を作成ないし收受して保管してきた個人や組織体を重視する「出所原則」を尊重する立場からである。また郷土資料(史料や当該地域の史料目録類が収録されている場合が多く、本書未収分の情報が補完できる)や主として地方自治体が発行する行政刊行物の目録類及び新聞記事目録(あるいは索引)なども含めた。図書館の蔵書目録シリーズの場合は、郷土資料編だけを収録することにし、一般図書蔵書目録は除外した。また、地方史誌類や逐次刊行物に収載されている目録類も収録した結果、約四、七〇〇タイトル・八、七〇〇冊に及んだ。

本書の編集は、史(資)料目録類書誌データベースSACIS (=Shi-yokan Archival Catalogue Information System)を基礎にしている。本文の排列は原則として出版地の都道府県別で、各都道府県内は編集(あるいは発行所、以下同)の五十音とした。そのため出版地と史料の出所が異なる場合や、当該目録の内容が出版地以外の地域に関するもの

についてはその都道府県名を関係地として表記した。シリーズで編者や発行所が途中から変更している場合は、初出を優先し、一般注記に以後の変更を表記した。また、シリーズの場合は本文上で体裁を整える方が便利であることから内容細目として表記した。そもそもコンピュータを利用してデータベースを作成するメリットの一つに並べ替えた結果を出したものがそのまま冊子体目録としても活用できることにあるが、同一書名が並ぶ不便さや頁数が多くなるので、機械力だけでなく、人力を投入して利用の便宜を図った。索引編は書名索引と関係地索引からなり、書名索引には副書名や付(つけたり)で副書名とみなされるものも含めた。

本書に収録した目録類は、史料館閲覧室で全て閲覧公開される。また本書を手がかりに史料調査を実施される時には、まずもって当該目録の編者あるいは発行所へ事前連絡・照会を是非とも励行されるようお願いしたい。特に個人所蔵の史料については、所蔵者に様々な事情があるためである。それぞれの地域で史料目録を公にすること自体、またそれらを本書のように、目録の目録として全国的レベルで公開することは、様々な現実的問題がある。史料目録

を公にすることは保存と利用が目的であるのに、目録だけが一人歩きして散逸を助長する材料になることを危惧するのである。もし、本書が本来の目的以外に利用されるならば、史料館の意向を理解して貴重な内部資料を含む所在目録を快く提供して下さった目録作成者に対しても申し訳ないことになるし、今後この種の情報を公開することに支障を生じるだろう。それを防止するには、本書を利用する全ての人が、史料の保存に対し十分な関心をもっていただきたい。一方では、調査者(機関)が史料を整理し、目録を作成する意図や目的、さらには史料そのものの重要性を所蔵者に対して明確に伝えることだけでも意義があるように思う。同時に調査後も所蔵者と連絡をとり合い、保存についての適切なアドバイスが不可欠ではないだろうか。

今後史料所在情報の提供について関係諸機関・各位のご協力をお願いするとともに、書誌事項の不備や脱漏などについてご教示、ご助言をお寄せいただければ幸いである。

発売元

(株)三省堂

発売日

本年三月末日

体裁

B5判 本文索引四六八頁  
上製本(箱入)

定価

九、〇〇〇円(税込)

## 講師による史料管理学研修会検討会開催

史料管理学研修会の講師による検討会は一九八九（平成元）年度から実施されてきたが、本年度は、一九九二年一月九日午後二時より国文学研究資料館大会議室において行なわれた。出席者は、講師二〇名・史料館員一名のほか、館長・管理部長を含む計三三名であった。以下、その概要を報告する。

検討会は、森安彦・小山弘志館長の挨拶、館員・講師の自己紹介のあと、森安彦の司会により進められた。

まず最初に、安藤正人による今年度研修会の概要報告が行なわれた。そこでは、今年度の特色として、①一コマを九〇分から七〇分に変更したこと、②時間配分ではカリキュラムの四つの柱のうち「記録・史料管理論」に力点が置かれていること、③昨年度の「関連科目」を「記録・史料管理論」に組み込んだこと、④新設科目として「近世史料論総論」・「史料管理プログラムの設計」があり、また見学先としては法政大学大原社会問題研究所を新たに設けたことが述べられた。さらに、⑤研修生の所属別・地域別内訳、⑥レポート

の題目、⑦来年度（平成四年度）研修会の日程が報告された。

引き続き今年度研修生の意見が紹介された。カリキュラムの問題として、まず講義間の関連性・研修会全体の体系的性を問う声が多く、また個別には博物館の問題や複写に関する法的問題も取り上げてほしいとの要望があった。形式の問題としては、講義ばかりでなく講師・研修生を含めた意見交流の場を求める意見もあった。

以上の報告をふまえて、各講師が感想を述べた。全体として、伝えるべき内容の豊富さに比しての時間の少なさを訴える声が多く、それへの対処として講義の活字化を提案する意見があった。さらに、史料保存機関・自治体史編纂・大学史編纂・大学院生など多様な所属にわたる研修生への講義の難しさを述べる感想もあった。

カリキュラムの体系的の問題に対しては、講師の講義聴講・講義録音の公開や、史料館に講義間の調整機能を求めたり、あるいは講師同士の事前の打ち合せが必要ではないかと

の意見も出された。また、研修会の意図する体系が実際の時間割りに必ずしも合致していないのではないかと指摘もあった。さらにこの問題に関しては、逆に研修生の主体的な受講姿勢を求める発言もあった。

講義の内容に踏みこんでは、近現代史料にかかわる講義（近現代史料論・現代行政文書の評価と移管・各機関における史料管理）について二三の問題が指摘された。ひとつには、個別機関の経験のみから議論を組み立てなければならぬ限界性があり、それをカバーしうる総論が必要となってくるということである。第二には、対象が行政文書に偏りがちで他講義との関連がわかりにくくなっていくというもの。第三には、短期研修の問題として歴史学の史料論と文書館の史料論には違いがあり、別々の講義としてとりあげるべきというものである。これらは先のカリキュラムの体系的の問題ともなる。

関連分野の講師からは、①企業の記録管理と史料の管理との間の「廃棄」に対する感覚の違いを感じた、②図書館も文書館と共通の課題を持っているのだから、むしろ図書館と文書館の垣根を越えていくべきだ、③各機関の防災計画の具体例を交流

させるのが課題、④裁判記録の保存問題に関し官側の人間を講師として呼んだらどうかとの提言、などなどの感想・意見が寄せられた。

また、講義を行なったのメリットとしては、マイクロフィルムの保存問題など各機関からの研修生と交流が出来るとの声もあった。

一通り講師の発言を終えたところで終了時刻を迎えてしまい、司会が講師の意見をこれからの研修会に生かしていきたいとの謝辞を述べつつ、研修会の講義をブックレットとして刊行したり、研修レポートを講師に閲覧公開したりすることを考えてみたいと述べて検討会をしめくくった。

（渡辺 浩一）

# 箭内家文書の整理を終えて

渡邊尚志

私は、一九八八年四月に史料館に就職したので、今回が初めての目録作成であった。私が担当した箭内（やない）家文書は、陸奥国白河郡踏瀬（ふませ）村の庄屋・問屋などを勤めた箭内家に伝存した文書群で、同村が奥州道中の宿駅であったことから、交通関係の史料が多数残っており、それが本文書群の一つの特色となっている。

小稿では、以下、同文書中の寄合関係史料について簡単な紹介を行いたい。

箭内家文書中には一七点の村寄合関係の文書があり（村会関係の文書は他にある）、そのうち一四点が「丑村寄合帳」、「村寄合帳」という表題をもっている。表紙には、「踏瀬駅」、「踏瀬村」などと記されており、村の公的記録であること示している。寄合は毎年正月二日に開かれるのが通例で、明治に入り新曆に切り替って後も旧曆正月二日の前後に開催されている。「村寄合帳」は、毎年の寄合での決定事

項を記録した帳面で、横美半折の薄い冊子である。年代は元治二（慶応元、一八六六）年のものが最も古く、以下、慶応二（明治四（一八七二））、明治六（八、同一〇）一（二、同一四）の各年のものが残っている。

元治二年の「丑村寄合帳」（文書番号四五七）の内容をみると、まず同年の宿（村）内諸役人が願いにもとづき決定されている。例えば、帳付役には大助と村上河内（神職）の兩名が年一兩一分の給金で就任している。この他に、馬指・小走・供番・廻り宿・山守役・奉仕頭・馬番などの諸役人が決定され、このうち山守役と馬番は若者組が勤めている。次いで刳銭や廻米についての決定事項の記載のあと、村民各戸の軒役負担率が、巷・七分五厘・半・四ヶ一の四種類で示され、最後に村持地と思われる土地関係の記載がある。このパターンは基本的に以下毎年同じであり、村内諸役人の決定、村内各戸の軒役負担率の決定などが、各年の村寄合で必ず決定されねばならない

重要事項であったことがわかる。しかし、村寄合の座順、議事進行のプロセス、議論の内容、議決法など寄合の具体相については何も語ってくれないのが残念である。

明治三年の「寄合一件二付書付控」（四六七）と題された史料によれば、同年の寄合に際して、宿方下役人たちから問屋である箭内名左衛門に対して、大通行の際の諸入用負担方法、小走役の勤め方などについての要求

が出され、箭内側がそれを断つたところ、下役人ら一同は同村の慈眼寺に集まって相談の上、白河県役所へ願い出しようとしたことがわかる。村寄合での意見の対立が決着をみなかった場合、立場を同じくする者のみが別に集会をもち、役所に出訴しようとすることもあったのである。一般的にも、こうしたプロセスを経て発生した村方騒動は多かったことであろう。

村寄合は明治に入ってから継続して行われ、例えば明治一〇年の「村寄合牒」（四九二）をみると、小走役・大役口・小普請口・人足口・馬口・廻り宿・山守・馬番・帳附などの各役人が取り決められている。これら村内の役職は一部に名称の変更もあるものの、小走・帳附・廻り

宿・山守・馬番などは明らかに近世との連続性を示しており、また山守と馬番は「元若者」が勤めている。ただ、明治初年に宿駅制度が廃止されたため、近世にみられた村内各戸ごとの軒役負担率の決定は、明治一〇年には行われていない。こうしたところに、近世と近代の違いがみとれよう。

また、同年の寄合では、「不幸之節是迄は手伝之義ハ適宜にて相頼、棺カツキ穴掘等重立候役人ト被申聞仕来候処、分テ端郷方ニテハ為知遅之為メ多クハ穴掘棺カツキ等余計ニテ難決仕候間、已来五人組并親類方ニテ取仕廻候積」という、葬儀に関する取極めがなされているのが興味深い。ここから、明治に入って踏瀬村に合併された周辺の新田村（端郷）にかかっていた過重な負担が均等化されたこと、近世以来の五人組が依然社会組織として存続していること等がわかる。

以上、ささやかな事例紹介を行ったが、箭内家文書には興味深い論点が数多く含まれている。多くの方々の利用を切に希望する次第である。

# 『古沢家文書目録』(その一)

## の編集を終えて

丑木 幸男

武蔵国大里郡大麻生村古沢家文書は、昭和二十七年に当館が古沢家から直接譲り受けた文書群である。譲り受けてから四〇年経過したことになる。仮整理を行い、閲覧に供してはいたが、膨大なため目録作成までにはいたっていなかった。

私は群馬県で高校の教員をやりましたが、周辺の地方文書の調査や、その後、群馬県史編さん室の職員として同じく地方文書の調査をてがけてきた。ほとんどの在地の史料は劣悪な環境のなかにあり、保存環境が悪化し、文書の劣化が進行している。蔵のなかでほこりやねずみの糞にまみれ、蟻の巣になっていて卵が古文書に産みつけてあったこともある。冊子ものでは開頁不可能なものも多かった。

さらに、住宅の改築が進むなかで、保存スペースそのものがなくなり、古文書の滅失が急速に進行している。個人所蔵の史料だけでなく、県庁や市町村役場の史料も同様である。特に市町村役場では行政史料を保存す

で行うことにした。

る意識は極端に薄く、書庫はあるが現用文書を保存している程度で、倉庫と化している所が多い。役場文書も永久保存と規定してあっても、書庫スペースがないために次々に廃棄されている。書庫の保存環境も劣悪であり、史料調査で一時間も中にいれば夏は蒸し風呂のようになり、ほこりと汗でいたたまれなくなり、冬は冷凍庫と同様になってしまう。そうした史料の劣悪な状況を見るにつけて、史料保存についての危機意識は大きかった。調査体制も充分なものではなく、ひとりで調査することも多かった。そのため、史料の概要をつかむのが精一杯であり、あるいは、編纂に必要な史料を見つけないとがいがれるので、あわただしく史料調査を続けてきたため、いくつか文書目録も作成したが、丁寧なものではなかった。

平成二年度に当館に赴任して、史料保存機関での史料整理や目録作成をできることになり、旧蔵地が群馬県に隣接している古沢家文書を選ん

古沢家は埼玉県熊谷市から神奈川

県に転居し、現在は旧蔵地には居住しておらず、所蔵史料は当館と埼玉県立文書館とでそれぞれ譲り受けたので、分散して所在している。今回、整理できたのは当館所蔵分の約半分であり、古沢家文書の全貌は把握できていないので、性急な結論は慎まなければならぬが、村方文書の平均的な所在形態であろうと思われる点に、興味をひかれた。ほぼ世襲をしている近世の名主としての文書、近代になり戸長もつとめたのでそれに関係して戸長役場文書、および古沢家の私的な文書の三つに出所が分けられるが、名主や戸長は古沢家で独占した訳ではないので、大麻生村の文書全体ではない。残念ながら大麻生村では古沢家以外では史料が保存されていないようなので、大麻生村の史料の全体像は把握できない。

名主文書については各地の調査事例が豊富に報告されているが、戸長役場文書についての詳細な報告事例は少ないので、あえて戸長役場文書については、名主文書と一括せずに独立させた。しかし、古沢家では明治二十二年の町村合併まで戸長をつとめたのではなく、十五年には戸長

をやめてしまっているので、时期的

にも郡区町村編制法時代の途中までの文書しかなく、明治十七年の改正などの経過のもとの戸長の職務の変化や、戸長から村長への文書の移管などを追求することはできない。

そうした限界はあるが、関東における平均的な名主から戸長までの史料管理の実態が、うかがえる史料群といえよう。

なお、明治初年からの当主の古沢花三郎は、熊谷地方で自由民権運動にも参加しているが、日記や書簡などを通して、その実態が解明されることが期待できる。それと同時にその後の活動、およびさまざまな政治活動、経済活動、文化活動などを解明して、古沢花三郎の生涯のなかで民権運動を位置づける必要がある。さらに民権運動の時代だけでなく、大麻生村の名望家としての近世から近代にいたる活動の全貌を解明することにより、関東における地方名望家の一つの典型が描き出せるものと思う。

古沢家文書の整理を通して、歴史研究や自治体史編纂などのための史料調査と、史料保存機関の目録作成のための資料調査との違いを痛感した。

松江藩郡奉行所文書(伝「御徒文書」の内)  
中間報告

島根県立図書館所蔵

## 一、調査日程と参加者

一九九一(平成三)年一〇月一四日から一〇月一六日までの三日間、松江市内中原町五二番地島根県立図書館において、同館所蔵の松江藩郡奉行所文書(伝「御徒文書」の内)の調査を実施した。調査参加者は、現地から松本美和子、岡本久美子、岩根栄子、内田文恵、北村久美子の五氏、当館から大藤修、大友一雄、安藤正人、廣瀬睦の四名であった。

## 二、調査史料の性格

島根県立図書館に「御徒(おかし)文書」と呼び慣わされている記録史料群が所蔵されている。この史料群は、明治四年に成立した松江県(のち島根県)が旧松江藩から引き継いだ藩政文書の一部で、長いあいだ島根県警察本部の倉庫に眠っていたままになっていたが、一九七二(昭和四七)年に島根県立図書館へ移管されたものである。目録としては、一九五八(昭和三三)年に島根県広報文書課が作成した『松江藩御徒関係

記録文書目録』という謄写刷りの簡単なものがある。

史料群の量は、冊子が一五〇冊余り、袋入りの文書が約一四〇袋である。このうち冊子体文書は「御徒一切事記」「旧例帖」「御徒旧例」など、御徒役人の公用記録であり、まさに「御徒文書」と呼ぶにふさわしい性格のものである。しかし袋入り文書の方はそうではない。これは、山論地境論、網場出入り、金銭貸借出入り、相続争い、溺死人一件等々、領内百姓の争論・訴訟その他の事件に関わる、いわゆる一件文書群であって、その中身はいえ、百姓らから郡役人、あるいは郡役人から郡奉行所に差し出された訴状、願書、書状などの上申文書の原本、およびその逆コースの下達文書の控えなどから構成されている。つまりこれは、郡奉行所が郡方支配行政、とくに訴訟や争論の審理・裁決に関わって授受したり作成したナマの郡奉行所文書なのである。そのことは、多くの袋に「〇〇〇一件 郡奉行所控」とか、「〇〇〇一途 郡奉行何某」と

いう表書があることから明らかである。

これらの文書がどういう経過で御徒文書と一緒にになったかはわからない。しかし少なくとも、藩政時代に御徒の職務に關係して郡奉行所から御徒役人に移管されたとは考えにくい。おそらくは旧藩から県に引き継がれたあと、たまたま一緒に保管されていたものを誰かが一括して「御徒文書」と呼ぶようになったものであろう。

今回調査の対象としたのは、「御徒文書」といわれているものの全体ではなく、袋に入った一件文書群だけである。これを「御徒文書」と呼ぶのは、右の説明からおわかりいただけるように、あまり適切でないと思われる。そこで今回の調査では、便宜的に「松江藩郡奉行所文書(伝「御徒文書」の内)」という仮名称を用いることにした。

## 三、整理・保存と利用の状況

松江藩郡奉行所文書は、島根県立図書館特注の文書史料用ダンボール箱(タテ40・〇cm×ヨコ22・5cm×高さ25・〇cm)二三箱に収納され、図書館地下書庫の電動書架に保管されていた。一箱に一件文書が、大き

いものだと一ないし二袋、小さいものだと五〜六袋ずつ収納されている。各袋の中には少ないもので十数点、多いもので百数十点の文書が、多くの場合大小いくつかの束にまとめられて入っている。明治以降整理の手がほとんど入っていないため、袋の中は幸い郡奉行所で保管されていた当時の原形が比較的よく残っているように身受けられる(ちなみに一九五八(昭和三三)年に島根県広報文書課が作成した前掲『松江藩御徒関係記録文書目録』は一件文書の袋の表題を記しているだけで中身には触れていない)。

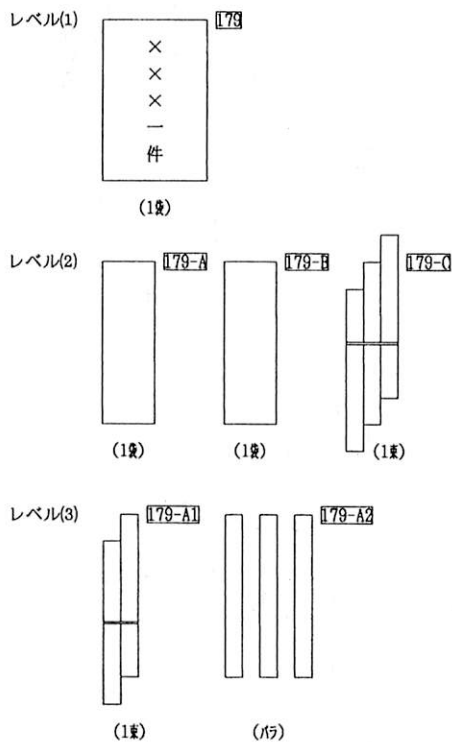
ただ、山論関係文書については、『出雲藩山論史料集』第一集、第五集(島根郷土資料刊行会発行、一九七三年〜一九七四年)として翻刻されており、その際に保存の原形が若干崩れた模様である。また、一九七三(昭和四八)年の鳥取県との県境問題の際に一部の文書が利用されているが、その部分もやはり保存の原形はかなり変更されてしまっているようである。

## 四、調査の方針と方法

史料所在調査といえば従来、史料の内容を把握することに重点が置か



図 1



れ、一点ごとの目録を取ることに力が注がれてきた。しかし最近では、史料所在調査は長期的整理の第一段階であるという考え方から、(1)史料群の原秩序解明の手がかりとなる保存の現状を記録化すること、(2)史料群全体の概要を把握して、長期的整理計画立案の基礎データを整えること、の二つを史料所在調査の主たる目的に据えるようになっていく。

(1) 文書小群記号・番号付け  
一つの袋にはふつう一つの一件文書が入っており、それは小さな文書の束が何重にも重なって構成されている。それらの束を見分け束ごとに記号・番号を付ける（中性紙のスリップを挟む）。記号・番号は図1のように原則としてレベル3まで付ける。

(2) 現状記録撮影（写真1～4）  
袋全体、および番号を付けた文書の束の写真撮影を行う。撮影は原則としてレベル3までである。レベル2またはレベル3がすべてバラ文書の場合には、そのことがわかるように、レベル1の番号またはレベル2

写真3 レベル2 (Hの束)

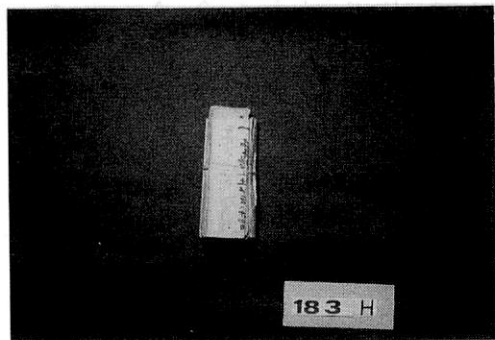


写真1 レベル1 (袋の表)

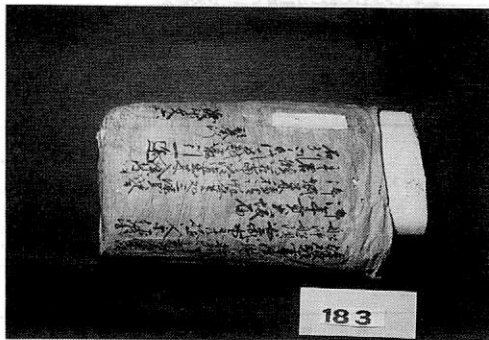


写真4 レベル3 (Hの束を構成する6つの束)

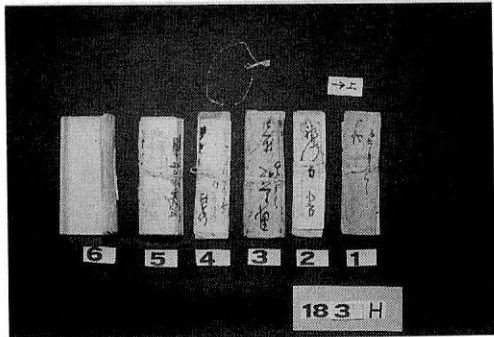
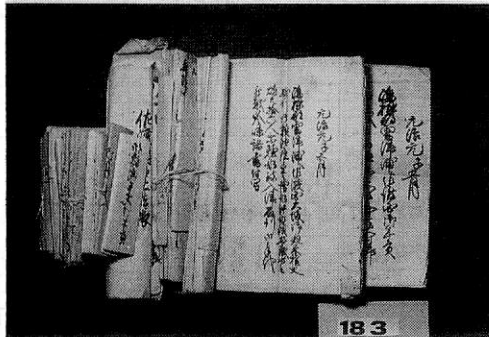


写真2 レベル1 (袋の中身全体)



の番号を付けて、バラのまま全体を撮影する。

(3) 調査用紙の記入

史料調査用紙は、これまで史料館が使用してきた用紙ではなく、新たに現状記録に適したものを試作して使用した(図2、現物はA4版)。

(a) 保存形態

撮影が終わったものについて、各袋(一件)ごとに保存形態の概要を調査用紙の「保存形態」欄に記入。

(b) 通し番号付け

各袋ごとに、一点一点の文書に通し番号をつけ中性紙スリットを挟み込む(袋の中の文書総数および各束の文書点数の確認)。ここでいう一点一点の文書とは、物理的に独立している一通、一冊、または一綴りの文書をいう。

(c) 概要記述

文書の概要記述は、レベル1から原則としてレベル3まで行う。ただしレベル3が大量で煩雑な場合はレベル2までの記述にとどめ、レベル3についてはごく簡単な概要または一、二点のサンプル記述で済ませてもよい。

レベル1(袋=一件文書の全体)

の概要記述は、最初に事件の名称を書き(原則として「松江藩御徒関係

記録文書目録」に記されている表題を採用)、これに続いて袋表書および袋裏書を筆写しておく。

レベル2およびレベル3の概要記述は、袋、束、冊子については、原表題があるものはそれを取り、原表題がないものは適切な仮表題を与えて( )を付す。状物の場合はたいてい端裏書があるので、適切と認められる場合はそれを表題とする。差出し、宛名その他文書内容に關

する必要な情報は内容欄に記す。形態・数量・備考欄は、とくに文書のかたまり(束、袋、包)の形態がわかるよう配慮して記述する。

五、今後の計画

今回の調査は以上までの作業を合計二八袋について行った。袋の数でいうと全体の二〇パーセントであるが、残りは小さい袋が多いので、量的には半分近く終了したといつてよ

いのではないかと思う。次年度も引き続き調査を続行する予定である。なお所在調査の(1)~(3)の作業が終了すれば、次の段階として、(4)文書の装備(ラベル貼り、封筒入れ・箱入れ)と補修、(5)本格的な目録の作成、に進んでいく必要がある。これについては島根県立図書館によって実施されることと思うが、当館としても積極的に協力していきたいと考えている。

(安藤 正人)

図2

史料調査用紙 (b)

| 文書群 | 保存形態  | 内 容  | 年 代 | 形 態        | 数 量         | 備 考         |
|-----|---|--|-----|------------|-------------|-------------|
| 153 | 大2の袋の中に、小2の袋が4つ(A, B, E, F)と輪図のまわり(C), Aの1枚の袋のバラけたもの(D)が入っている。比較的、保存の原形が残っており、目録に記述した。Dは、袋から分離して、またもとの袋に入れ直し、 |  |     |            |             |             |
|     |   | 島根郡邑生利所両利真山三袋二付<br>松外山代蔵有全輪所出入出来落着一途   |     | 袋入<br>(細付) | 1袋<br>(151) | 現状記録<br>撮影済 |
|     | (袋裏書)   | 寛政十年五月 濟<br>大分年と五一途を入置   |     |            |             |             |
|     |   | 島根郡邑生利所両利真山三袋二付<br>松外山代蔵有全輪所出入出来落着一途   |     |            |             |             |
|     |   | 附島根郡邑生利所蔵在御門清藏<br>生福前門中四人七名の同即松外山<br>代蔵有袋内三三門下二層下伏袋後<br>百兩守と附此有三五五番不詳味相末<br>取引一途 |     |            |             |             |
|     | (袋裏書)   | 島根郡三番権   |     |            |             |             |
|     |   | (153-1)  | 記入者 | 安藤正人       | 記入日         | 1991/10/14  |

史料調査用紙 (b)

| 文書群 | 保存形態 | 内 容  | 年 代  | 形 態        | 数 量                      | 備 考                                |
|-----|------|--|------|------------|--------------------------|------------------------------------|
| 153 |      |  |      |            |                          |                                    |
| A   |      | 邑生利所両利真山三袋二付<br>御清付 石佐又五御門                                     |      | 袋入<br>(細付) | 1袋                       |                                    |
| A1  |      | 一 邑生利所両利真山三袋二付<br>一 御清付 石佐又五御門<br>一 御清付 石佐又五御門<br>一 御清付 石佐又五御門 | 寛政十年 | 袋入<br>(細付) | 1袋<br>(4通)               |                                    |
|     |      | 1 先袋の差込置袋一枚二付付録書   | 寛政十年 |            | 1通                       |                                    |
|     |      | 2 居下下書   |      |            | 1通                       |                                    |
|     |      | 3 居下下書   |      |            | 1通                       |                                    |
|     |      | 4 先袋の差込置袋一枚二付付録書   | 寛政十年 |            | 1通                       |                                    |
| A2  |      | 島根郡邑生利所両利真山三袋二付中袋裏書付 和   |      |            | 44枚<br>(40通<br>2冊<br>2冊) | Almanac<br>袋の袋の袋<br>袋の袋の袋<br>袋の袋の袋 |
|     |      | (153-2)  | 記入者  | 安藤正人       | 記入日                      | 1991/10/14                         |

# 平成三年度 新収史料紹介

⑧はマイクロフィルムによる収集を示す。

## 美作国 津山 松平家文書（愛山文庫）

昭和六一年度、平成元年度に引きつづき、平成三年度も特別研究「近世史料の古文書学的研究」により、津山郷土博物館所蔵の松平家文書のうち、「国元日記」を昭和四年と天明四年までの二三冊、文化一三年二冊、「津山日記」を享和元年と文化二年までの六冊、「郷中御条目」等一部をマイクロフィルム撮影により収集した。なお、「国元日記」のうち、明和二年と同三年の四冊、天明五年と寛政五年の六冊は現在、修復のため今回は収録できなかった。

なお、津山松平家に関する概要、および既収史料の内容については本誌四六号および五二号を参照されたい。複写のご許可を頂いた津山郷土博物館に深甚の謝意を申し上げる。（現蔵者＝津山郷土博物館、岡山県津山市山下九二。収録点数一五〇、八、五九八コマ）

## 肥後国天草郡 本戸組大庄屋 木山家文書

木山家文書の第七次撮影を行なった。今回の撮影史料はすべて近代に属するもので、『旧本戸組大庄屋役木山家古文書目録（稿）』のうち、「二、近代資料編」に掲載されている「(1)行政」及び「(3)蚕糸業・製糸伝習所」の諸史料が中心である。

「行政」関係史料は、十二代当主木山重吉氏及び十三代当主木山惟重氏の村会議員・町会議員活動に関わるものが主で、昭和五十七年頃の本戸村議会議史資料（議案書、歳入歳出予算書など）、昭和九と十三年頃の本渡町議会議史資料（選挙人名簿、町会関係綴など）、合わせて約五十点を撮影した。

「蚕糸業・製糸伝習所」関係史料は、明治二六年に木山重吉氏が中心となって設立された天草郡蚕糸業組合製糸伝習所の史料や、大正と昭和前期の天草郡繭共同販売利用組合の史料などである。特に前者の製糸伝習所史料は短期間ながらよくまとまって残っており、興味深い。（現蔵者＝本渡市浜崎町一―一五 木山惟

彦氏。収録点数一三八点。十リール、五、七八〇コマ）

## 美濃国大野郡 高山町 高山町会所文書

飛騨の高山郷土館は、高山地方に関する数多くの史料を収蔵するが、今回はそのうち旧高山町の基本史料ともいえる「高山町会所文書」の撮影をおこなった。

この文書は、同町の町年寄の公文書であり、町年寄の職務の遂行にかかわって作成・保管されてきたものである。町年寄は、一之町の矢島氏、二之町の川上氏、三之町の屋貝氏が世襲しており、その端緒は金森時代（元禄五年に山形上山への転封）にまで遡る。金森時代の町会所には矢島氏の自宅が用いられ、転封後は一之町の伊勢屋が町抱えの会所となった。その後移動があるが、詳細は不明である。なお、会所での事務の取り方も時代によって異なる。寛政七

年一〇月には、三人で執務する形態から一人ずつの月番制になり、同一三年には三人勤務に復し、さらに、その後月番となる。文政一〇年にも変化があり、三人勤務となるようである。

執務形態の変化は、会所での文書の管理形態にも大きな影響を及ぼしたことが予想される。先に記した通り「高山町会所文書」は、旧高山町の基本史料であり、その内容も多岐にわたる。総数も、かなりの数にのぼる（この文書群の目録は、現在作成中とのことである）。今年度のマイクロフィルムによる収集においては、そのなかから「町年寄日記」（文政一四年と明治六年）五九冊と、「町年寄願書留」（文政一〇年と明治五年）五三冊のうち一〇冊を撮影した。（現蔵者＝岐阜県高山市一之町七五、高山郷土館、収録点数六九点。二〇リール、一二、二五七コマ）

## 受贈図書 平成三年度 (一)

（静岡県）春野町史料所在目録 第1

・2集〔春野町史編さん委員会〕

北海道開拓記念館一括資料目録 第21・

22集

小樽商科大学経済研究所特殊文献目録

北海道立文書館所蔵資料目録 4/6

小樽市博物館所蔵資料目録 第11集

北海道開拓記念館収蔵資料分類目録 9・

苦小牧市博物館所蔵資料目録 3 / 5  
蔵書目録一九八八年九月現在 (金沢経済  
大学経済研究所)

郷土資料目録 (盛岡市中央公民館)

仙台市民図書館郷土資料目録 19

宮城県内公共図書館所蔵郷土関係論文目  
録 第二篇 (宮城県図書館)

能登羽昨天領文書目録 (羽咋市教育委員  
会)

宮城県桃生郡河北町神山家文書編年目録  
第一期分 (石巻古文書の会)

(秋田県) 比内町文化財目録 第8・10  
号 (比内町教育委員会)

秋田県内市町村立図書館雑誌・新聞総合  
目録 (秋田県立秋田図書館)

秋田県内出版物目録 昭和53 / 62年版  
〔同右〕

秋田県立秋田図書館所蔵東山文庫目録  
秋田県立秋田図書館所蔵郷土関係主題別  
文献目録 昭和59年12月現在

秋田県歴史資料目録 第二十五・二十七  
集 (秋田県立秋田図書館)

古文書近世史料目録 第12・13号 (山形  
大学附属博物館)

山形県関係新聞記事索引 昭和63年版・  
平成2年版 (山形県立図書館)

(山形県) 白鷹町史料目録 第1 / 3  
集 (白鷹町教育委員会)

歴史資料館収蔵資料目録 第18 / 20集

〔福島県文化センター〕

郡山市歴史資料館収蔵資料目録 第1 /  
5集 (郡山市教育委員会)

茨城県立歴史館 史料目録 23 / 29

茨城県立歴史館蔵書目録 郷土資料 昭  
和57年3月31日現在

取手市史資料目録 第十一 / 十四集 (取  
手市教育委員会)

刈谷市史文書目録 1 (刈谷市教育委員  
会史編さん室)

土浦市史資料目録 第三集 (土浦市教育  
委員会)

土浦市史編纂資料 第三集  
栃木県史料所在目録 第18 / 20集 (栃木  
県立文書館)

群馬県郷土資料総合目録 追録11 (群馬  
県立図書館)

群馬県近世史料所在目録 31 / 34 (群  
馬県教育委員会)

群馬県立文書館収蔵文書目録 6 / 9  
群馬県行政文書件名目録 第3・4集  
〔群馬県立文書館〕

山田武麿文庫目録 (同右)

伊勢崎市史料所在目録 市立図書館Ⅱ  
伊勢崎市立図書館蔵郷土地図目録 平成  
2年3月現在

川越市立図書館郷土資料目録 平成元年  
3月

埼玉県立文書館収蔵文書目録 第28 / 30集

埼玉県行政文書館目録 第4集 (埼玉県

立文書館

埼玉県行政文書件名目録 県報編Ⅰ・Ⅱ  
1・1-2 (同右)

埼玉県史資料所在目録 第五集 (埼玉県  
県民部史編さん室)

埼玉資料年報 昭和62年度・平成元年度  
〔埼玉県立浦和図書館〕

所沢市史調査史料 30 (所沢市史編集委  
員)

埼玉県神社関係古文書調査報告書 (埼玉  
県立文書館)

熊谷市行政古文書目録 (熊谷市立図書館)  
船橋市史料所在目録 (5) (船橋市企画部情  
報管理課)

千葉県文書館・収蔵文書目録 第二・三集  
松戸徳川家資料目録 第1・2集 (松戸  
市教育委員会)

奈良市古文書調査目録 (二)・(四)・(五) (奈  
良市教育委員会文化課)

相生市史編纂資料目録 第十号 (相生市  
教育委員会)

淡路文化史料館収蔵史料目録 第一 / 五集  
立正大学古文書学研究叢書 No.27 (立正  
大学古文書研究会)

(群馬県) 大間々町誌「基礎資料Ⅰ」  
〔大間々町誌刊行委員会〕

公文類聚目録 第5 (国立公文書館)

改訂増補大江文庫目録 (四)江戸時代編 (稿  
本) (東京家政学院大学附属図書館)

東京都公文書館所蔵庁内刊行資料目録

明治大学刑事事博物館目録 第54・55号  
租税資料目録 第八集 (国税庁税務大学  
校租税資料室)

古文書目録 第十一 / 十三集・付編Ⅰ・  
Ⅱ (小平市中央図書館)

芭蕉記念館資料目録Ⅱ 牧野家文書  
芭蕉記念館所蔵資料目録 V 第9集  
目黒区守屋教育会館・郷土資料室所蔵史  
料目録 四

岐阜県行政文書目録 昭和40年度編・昭  
和41・42年度編・昭和43年度編 (岐阜  
県歴史資料館)

高尾山菜王院文書目録補遺 昭和63年3  
月 (法政大学多摩図書館地方史料室)

日本音楽資料室展覧目録 昭和五十 / 六  
十三年 (上野学園音楽資料室)

旧武蔵国多摩郡下師岡村名主吉野家文書  
調査報告書 (東京都教育庁社会教育部  
文化課)

豊島区立郷土資料館収蔵資料目録 第三・  
四集 (豊島区教育委員会)

八王子市郷土資料館収蔵古文書目録 (八  
王子市教育委員会)

八王子市千人同心関係文書目録 第2・  
3集 (同右)

品川歴史館収蔵資料目録 行政資料編 (1)  
玉川学園教育博物館・館蔵資料目録 教  
育資料編

竹内家文書目録 (岐阜県歴史博物館)

武蔵野市史料目録編 1・2 (武蔵野市役所)

玉川学園教育博物館蔵資料展 展示目録一九八七

立正大学人文科学研究所年報 特別号 多摩市史総書 (3) (多摩市)

日本銀行所蔵銭幣館資料目録 (文書・圖書・画像史料) (日本銀行金融研究所)

国立国会図書館蔵写真帳・写真集の内容総覧―明治・大正編―

本学附属図書館蔵大江文庫本展示目録 (東京家政学院大学附属図書館)

下田家文書目録 (田無市史編纂委員会)

昌平坂学問所関係文書の全体構成―史料紹介― (国立教育研究所)

埼玉県羽生市近世史料目録 四 (幕領研究会)

坂崎文庫目録 (東洋大学図書館)

近世武道文献目録 (入江康平)

小川恭一氏収集文書目録 (笠谷和比古)

神奈川関係新聞記事索引 第27・28集 (神奈川県立図書館)

神奈川県立博物館人文部門資料目録 (13)

神奈川県古文書史料所在目録 第11・13集 (神奈川県立図書館)

新聞記事目録 第2・4集 (平塚市博物館史編さん係)

(神奈川県) 寒川町史新聞記事目録 第2集 (同右)

伊勢原市史資料所在目録 3 (伊勢原市)

秋田県湯沢市大町小川家史料目録 (加藤幸三郎)

厚木市歴史資料目録 1 社寺 (厚木市)

神奈川県立文化資料館戦前期公文書目録簿冊目録

(静岡県) 菊川町郷土史料目録 (第1・9・11集)

沼津市明治史料館史料目録 2・9

静岡県行政資料目録 (昭和60年1月―63年12月) (昭和60年1月―平成元年12月) (静岡県立中央図書館)

岐阜県史料調査報告書 第10・12号 (岐阜県歴史資料館)

岐阜県所在史料目録 第23・27集 (同右)

郷土雑誌文献目録 第三集 (岐阜県立図書館)

長野県郷土資料総合目録 増加第二集 (県立長野図書館)

桑山村松沢達雄家古文書目録 (長野県・浅科村教育委員会)

富山県公文書館文書目録 公文書―歴史文書二・四・五

十村岡部家文書目録 (石川県立歴史博物館)

久保勇家文書目録 (石川県中島町教育委員会)

敦賀関係新聞記事目録 (同右)

松平文庫福井藩史料目録 (福井県立図書館)

小島家文書目録追補 (福井大学附属図書館)

武生市本保町有史料目録 (武生市教育委員会)

山梨県立図書館所蔵郷土資料目録 昭和63年3月末日現在

山梨県立図書館所蔵古文書目録 8

豊臣秀吉文書目録 (三鬼清一郎)

松浦武四郎関係歴史資料目録 (三重県・三雲町教育委員会)

橋良文庫目録一九八三・一現在 (豊橋市中央図書館)

滋賀大学経済学部附属史料館所蔵史料目録 第三十八・三十九集

京都府資料目録追録 No.5・7 (京都府立総合資料館)

関西大学図書館シリーズ 第二十五輯

関西大学所蔵近世文書目録 その二

大阪城天守閣所蔵南木コレクション総目録 二

平橋家大工組文書目録 (門真市)

神戸市立図書館蔵品目録 地図の部5

大阪府立図書館所蔵地方史誌目録 昭和38年3月31日現在

特殊資料目録 第2集 (徳島県立図書館)

伊丹地方郷土資料総合目録一九六〇 (伊丹市教育委員会事務局)

岩手県立図書館郷土資料目録

武蔵野文庫解説目録 (武蔵野市役所)

柳沢文庫収蔵品目録 (財) 柳沢文庫

柳沢文庫漢籍標準漢籍目録 (同右)

広島県立文書館複製資料目録 第3集

岬の古文書 (大阪府・岬町教育委員会)

広島市博物館資料調査報告書 IV 織田幹雄スポーツ資料目録 (広島市企画調整局文化担当)

広島県内公共図書館郷土資料目録 第35号 (広島県立図書館)

山口県文書館地方調査員調査報告書 16

山口県文書館収蔵文書目録 7・9

明倫館・山口明倫館・越氏塾旧蔵和漢書目録 (山口大学附属図書館)

山口県歴史資料調査報告書 第六集 徳山毛利家歴史資料目録 (山口県教育委員会)

歴史収蔵資料目録 十三・十五・二 (改訂版) (瀬戸内海歴史民俗資料館)

福岡市博物館・収藏品目録 4

久留米市民図書館所蔵古文書・和漢書追

加目録〔古賀幸雄〕

安東家史料目録〔九州歴史資料館分館柳

川古文書館〕

柳川古文書館史料目録 第2、4集〔同

右〕

福岡市民図書館マイクロフィルム所蔵渡

邊家文書目録

和漢古書解題目録〔宮城県仙台第二高等

学校〕

堀切文庫目録〔福島県立図書館〕

群馬県行政文書簿冊目録 第5集〔群馬

県立図書館〕

群馬県史中世史部会資料目録〔群馬県教

育委員会〕

伊勢崎市史資料所在目録補遺Ⅱ〔伊勢崎

市教育委員会〕

東京都公文書館所蔵行政文書目録・学事

編 明治30、31年

足立風土記資料 古文書1、3〔足立区

教育委員会〕

近世・明治初期物価史料所在目録〔一〕

〔山崎隆三〕

京都十六本山会合用書類 目録Ⅱ〔中尾

堯〕

横浜市立大学図書館目録叢刊 第十集

姫路市史編集資料目録集 39、40〔姫路

市教育委員会〕

宇和島市三浦家史料集 第1〔南子古文

書会〕

愛媛県関係近世近代史料集目録稿・刊行

年代順愛媛県関係近世近代史料集目録

稿〔袖山俊夫〕

長崎市立博物館資料目録 文書資料編・

図書地区写真資料編

神仏習合をとおしてみた日本人の宗教的

世界―淡路島の調査を中心として―

〔元興寺文化材研究所〕

宝塚市史編集資料目録 14〔宝塚市立図

書館市史資料室〕

榛原郡五和村文書目録〔静岡県立中央図

書館葵文庫〕

近現代史料目録〔群馬県・笠懸村誌編纂

室〕

鳥取郷土選書 第10編〔久松文庫〕

神奈川県教育史資料目録 Ⅲ〔神奈川県

立教育センター〕

歴史編集資料室報告 第一集〔明治大学

歴史編集資料室〕

山本甚平家文書目録

早稲田大学図書館文書目録 第4集

豊田村古文書目録〔その一〕〔長野県・

豊田村教育委員会〕

柳川古文書館収蔵史料一覧〔平成元年

10月1日現在〕〔九州歴史資料館分館

柳川古文書館〕

北海道立文書館所蔵公文書件名目録 4

、6

学習院大学史料館所蔵史料目録 第九号

和歌山県立図書館郷土資料目録 増補改

訂版

和歌山大学附属図書館真砂町分館蔵

治・大正・昭和前期教科書目録

行政資料目録 昭和59年12月末日現在

〔和歌山県企画部統計課〕

和歌山市民図書館所蔵移民資料目録〔和

文篇1〕〔和歌山市民図書館〕

鶴岡市大泉地区古文書目録〔庄内史料調

査会〕

大山町西郷地区古文書目録〔同右〕

花泉町古文書目録〔岩手県・花泉町教育

委員会〕

鮭川村文化村資料集 第一、四号〔山形

県・鮭川村教育委員会〕

鮭川村史編集資料 第一、二号〔同右〕

郷土資料図書分類目録 其一、其二〔財

団法人斎藤報恩会〕

新発田市立図書館郷土資料蔵書目録〔昭

和58年3月30日増補2刷〕

函館区会関係資料件名目録〔函館市史編

さん室〕

十村渡辺家文書目録〔石川県立郷土資料

館〕

大鑑コレクション目録 刷物編〔同右〕

郷土資料室所蔵文書目録〔第1集〕〔松

阪市立図書館郷土資料室〕

行政資料目録 昭和63年3月〔三重県総

務部学事文書課〕

図書目録・資料目録〔昭和62年3月現在〕

〔和歌山県議会図書館〕

永光寺古文書調査報告〔井上鋭夫〕

教団史資料目録〔一〕、〔二〕〔金光教教学研究

所〕

〔宮島町〕史料所在目録〔広島県・宮島

町立宮島歴史民俗資料館〕

後藤家文書目録〔多久市立図書館〕

東原厚舎蔵漢籍分類目録〔多久歴史民

俗資料館〕

佐賀大学附属図書館漢籍目録〔別置之部

熊本市政資料目録〔熊本市教育委員会〕

武蔵文庫目録〔ハロン庫〕・〔閲覧室用

〔熊本市立図書館〕

佐賀県関係地域資料総合目録 昭和62年

度版〔佐賀県立図書館協議会〕

岩手県立博物館収蔵資料目録 第1、2

・5、6集〔岩手県文化振興事業団〕

昭和十年度以前収蔵郷土資料目録 昭和

三十四年度収蔵郷土人著作目録〔秋田

県立秋田図書館〕

秋田県立秋田図書館蔵時雨庵文庫目録

秋田県立秋田図書館所蔵郷土文献目録

2、4

三重県史資料所在調査報告書 Ⅰ、Ⅴ

〔三重県総務部学事文書課〕

佐賀大学附属図書館所蔵唐津藩庄屋文書

目録

維新史料編さん所の歩み

所蔵資料目録 平成元年度五月現在〔歴

史資料センター黎明館調査史料課〕

八重山諸島を中心とした古文書調査報告書〔沖縄県教育委員会〕

鹿兒島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録(Ⅱ)・(Ⅳ)・(Ⅴ)・(Ⅶ)

黒川古文化研究所所蔵品目録 第14・19  
奈良市史蔵書目録 第2集〔奈良市史編集室〕

奈良市史資料所在目録〔同右〕  
奈良市史資料所在目録 第2・4集〔同右〕

神奈川県立文化資料館蔵書目録 第3集  
神奈川県立文化資料館都役所文書件名目録

日本銀行所蔵・貨幣関係錦絵目録〔原島陽一〕

能登穴水・中居鋳物師・塩文書〔小林太二〕

北海道立図書館蔵書目録 21・22  
札幌市中央図書館蔵書目録 第9巻

札幌大学図書館所蔵雑誌目録 一九八九年版

札幌大学図書館増加図書目録 第8巻  
洋書篇・和書篇

釧路市立博物館収蔵資料目録 (Ⅸ)・  
(Ⅹ)

札幌市中央図書館蔵書目録 第7・8・10巻

宮城県立図書館所蔵雑誌所収児童文学関係文献目録 1

秋田県立博物館収蔵資料目録 自然Ⅲ

増加図書目録―昭和61年度・昭和62年度・昭和63年度〔福島県立図書館〕

伊勢崎市立図書館増加図書目録―昭和62年度・昭和63年度

群馬県立歴史博物館所蔵資料目録―民俗伊勢崎信用金庫文庫図書目録―一九八八年〔伊勢崎市立図書館〕

成田山仏教図書館新着図書目録 第69号  
国士館大学増加図書目録 昭和62年版・〔同〕索引

蔵書目録 平成元年度版〔東京都産業労働会館図書館資料室〕

東京都立中央図書館蔵書目録 一九七九―一九八三・社会科学産業

〔同右〕書名索引・著者名索引

静岡県立中央図書館蔵書目録 第6・7巻  
国宝および重要文化財建造物等の修理工事報告書目録〔東京家政学院大学附属図書館〕

國學院大学図書館圖書分類目録 和書の部 宗教1

二松学舎大学附属図書館和書目録・漢籍目録

東京都立中央図書館蔵書目録 一九八四―一九八五

〔同右〕書名索引・著者名索引

東京都立中央図書館逐次刊行物目録 年報・年刊 一九八九年八月末現在

神奈川大学図書館蔵書目録 一九八八年  
度版和書・洋書

神奈川県立図書館蔵書目録和書の部第19  
新潟大学所蔵漢籍目録 下〔新潟大学附属図書館〕

山梨県立図書館増加図書目録 第七巻  
愛知図書館蔵書目録第十・十一巻〔愛知県文化会館〕

大阪府立中央図書館蔵書目録 第20巻  
大阪府立大学雑誌目録 和文編第8版 一九八九

世界民間伝承文献集成目録〔奈良教育大学附属図書館〕

蔵書目録 第19・20巻〔鳥取大学附属図書館〕

静岡県立中央図書館蔵書総索引 図書・新聞

静岡県立中央図書館新聞雑誌目録 追録  
平成元年3月現在

千葉県立大根博物館収蔵資料目録 1  
長野市立博物館収蔵資料目録 自然1

諸家文書目録 Ⅶ〔鶴岡市郷土資料館〕  
憲政資料目録 第十五・十六〔国立国会図書館専門資料部〕

東洋大学史資料目録 (三)〔東洋大学創立百年史編纂室〕

港区資料室所蔵増補地図目録 昭和63年3月末現在〔東京都港区みなと図書館〕

(東京都)日の出町史料所在目録 第4集〔日の出町教育委員会〕

(神奈川県)寒川町史新聞記事目録 第3集

(神奈川県)寒川町史資料所在目録 第6集

藤沢市史資料所在目録稿 第22集〔藤沢市文書館〕

横浜市史資料所在目録 近現代 第2・3集

知多総研史料目録 第一集〔日本福祉大学知多半島総合研究所歴史・民俗部〕

門真市史料目録 第2号  
大阪府八尾市寺院古文書調査報告書〔八尾市教育委員会〕

伊勢原市史資料所在目録 4  
東京都文化財総合目録

田辺市史編さん史料調査 文書目録1  
広島市公文書館所蔵資料目録 第10・13巻

九州大学九州文化史研究所所蔵古文書目録 十七

大友・立花文書〔福岡県地方史研究協議会〕

沼津市史編さん調査報告書 第1集〔沼津市教育委員会〕

相浜村古文書目録〔長野県浅科村教育委員会〕

茂原市立木高橋家文書目録〔茂原市立図書館〕

蔵書目録No.6〔富士吉田市図書館〕

神奈川県立文化資料館県庁各課文書件名目録 1・2

富士市史資料目録 第1・2輯  
(群馬県)黒保根村誌基礎資料 第一・

伊勢崎市立図書館蔵 八坂用水資料目録  
土佐藩主山内家歴史資料目録〔高知県教育委員会〕

一般資料目録 平成2年3月〔郵政省郵政研究所〕

三重県史資料調査報告書 VI・別冊〔三重県総務部学事文書課〕

名古屋博物館蔵品目録 十一・十二  
資料調査報告書 第十七・十八集〔鳥取県立博物館〕

県内諸家寄託文書目録〔補遺〕〔大分県立大分図書館〕

大阪市立博物館蔵品目録  
大阪府行政刊行物目録総合版〔大阪府公文書館〕

向日市古文書調査報告書 第一集〔向日市文化資料館〕

桐生市立図書館蔵桐生市長沢家文書目録〔同右〕 桐生市村岡家・吉田家外諸家文書目録

桐生市史料目録 第3集〔桐生市立図書館〕

行政資料目録 平成3年1月1日現在〔愛媛県総務部学事文書課〕

井手三郎文庫目録〔東京大学法学部附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫〕

二豊〔豊前・豊後〕諸藩における藩札等の史料収集と研究〔日本銀行金融研究

紀州藩における藩札の史料収集と研究

〔同右〕  
小倉藩における藩札等の史料収集と研究〔同右〕

久留米藩における藩札の史料収集と研究〔同右〕  
盛岡藩における藩札の史料収集と研究〔同右〕

熊本藩における藩札の史料収集と研究〔同右〕  
松江藩における藩札の史料収集と研究〔同右〕

岡山藩における藩札の研究〔同右〕  
北海道立文書館史料集 第六

添田家史料〔室蘭地方史研究会〕  
東北歴史資料館資料集 29・31

仙台市文化財調査報告書 第一三〇・一四五・一四七集〔仙台市教育委員会〕

御龜鑑 第三卷〔秋田県立秋田図書館〕  
〔秋田県〕比内町史資料編 第五集〔比内町〕

〔秋田県〕比内町民俗調査報告書 第一集〔比内町教育委員会〕  
鹿角市史 第三卷〔上〕

米沢市史 第二卷  
寒河江市史編集叢書 第42集〔寒河江市教育委員会〕

山形市史資料 第78号  
東根市史編集資料 第24・25号

新庄市史編集資料集 第11・14・15号

〔新庄市教育委員会〕  
〔福島県〕田島町史 第3卷  
〔福島県〕山都町史 第2卷

〔福島県〕桑折町史  
福島市史資料叢書 第57・58輯〔福島市教育委員会〕

〔福島県〕滝根町史 第一卷 通史編・自然編  
〔福島県〕滝根町史資料集 第19・20集

茨城県史料 考古資料編弥生時代・近代産業編IV〔茨城県立歴史館〕  
取手市史 通史編I〔取手市教育委員会〕

龍ヶ崎市史 別編I  
図説土浦の歴史〔土浦市〕  
図説岩間の歴史〔茨城県岩間町〕

水戸市近現代年表  
鹿島町史別巻・鹿島人物事典〔茨城県鹿島町〕

茨城大学附属図書館郷土史料双書 一〔群馬県史 通史編7  
新編埼玉県史 通史編7・資料編14・別編4

与野市史別巻 井原和一日記I  
春日部市史 第四卷  
鳩ヶ谷市の古文書 第十五・十六集〔鳩ヶ谷市教育委員会〕

鳩ヶ谷市の文化財 第十五・十六集〔同右〕  
写真でみる船橋 1〔船橋市郷土資料館〕

我孫子の歴史を学ぶ人のために

3〔我孫子市教育委員会〕  
鴨川市史 史料編〔一〕  
鎌ヶ谷市史 資料編III―上

武蔵野市史 続資料編六  
稲城市史 上・下巻  
昭島市の社寺と石造遺物〔昭島市教育委員会〕

荒川区の民俗調査報告書 〔一〕〔荒川区教育委員会〕  
大田区の文化財 第27集〔大田区教育委員会〕

大田区の埋蔵文化財 第11集〔同右〕  
須原家文書 9〔江戸川区教育委員会〕  
江戸川区の文化財 〔一〕〔同右〕

江戸川区文化財調査報告書 第六集〔同右〕  
江戸川ブックレット No.8〔同右〕

葛飾区古文書史料集 五〔葛飾区教育委員会〕  
葛飾区文化財専門調査報告書 2〔同右〕

東京東郊農村の生産伝承 1〔同右〕  
国分寺市文化財調査報告 第32集〔国分寺市教育委員会〕

小平市郷土資料索引 第3集〔小平市中央図書館〕  
大沢家文書―近世I―〔墨田区教育委員会社会教育課〕

墨田区古文書集成 V〔同右〕  
台東区文化財報告書 第十一集〔台東区



教育委員会)

台東区の文化財 第二集(同右)

東京市史稿 産業篇第三十五・市街篇第

八十二(東京都)

東京都古文書集 第九卷(東京都文化課)

東京の民俗 7(同右)

八王子千人同心関係史料集 第四集(八

王子市教育委員会)

郷土資料館資料シリーズ 第18・19・20

号・第30号(八王子市郷土資料館)

五十子敬斎日記 大正十年・大正十一年

・大正十二年(日野市企画課)

日野市史料集 統地誌編(日野市史編

さん委員会)

府中市郷土資料集 13(府中市郷土の森)

高尾山薬王院文書 第二卷(法政大学)

民権ブックス ④(町田市立自由民権資

料館)

武蔵村山市文化財調査資料集 9(武蔵

村山市教育委員会)

田無市史 第一卷

世田谷区教育史 資料編四(世田谷区教

育委員会)

小田原市史料編 中世Ⅱ・近代Ⅰ

小田原市立図書館郷土資料集成 5

伊勢原市史 古代・中世資料編

伊勢原市史民俗調査報告書 4

神奈川県民俗調査報告書 十八(神奈川

県立博物館)

秦野市史 通史Ⅰ

秦野市史史料叢書 4・5

藤沢市史料集 (十五)(藤沢市文書館)

藤沢山日鑑 第九卷(同右)

横浜町会所日記(横浜開港資料館)

大和市議会史 記述編

(新潟県) 寺泊町史 資料編1

十村岡部家文書目録(石川県立歴史博物

館)

福井県史 資料編12下

鯖江市史 史料編第八卷

福井市史 資料編1・5

長野県史 近代史料編第5巻1・第10巻

(二)民俗編第5巻(長野県)

塩尻市誌 第一巻

富士見町史 上巻・(同)史料編(長野

県富士見町)

各務原市資料調査報告書 第十三・十四

号(各務原市民俗資料館)

静岡県史 資料編15・19・25

磐田市史 史料編2

裾野市史 第六巻

(静岡県) 韭山町史 第5巻下

(静岡県) 小山町史 第二巻

(静岡県) 菊川町史 近現代通史編

図書館叢書 1(浜松市立中央図書館)

豊橋市史 別巻

刈谷市史 第七巻

新修稲沢市史 本文編上・下

瀬戸市近世文書集 第一集

豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第12集

(豊橋市美術博物館)

四日市市史 第七巻

(三重県) 員弁町史

草津市史料集 1

膳所藩史料 第2巻(滋賀県立図書館)

史料京都の歴史 第1巻・16巻(京都市)

長岡京市文化財調査報告書目録第23集

向日市埋蔵文化財調査報告書 解説篇第

31集

大阪府史 別巻

藤井寺市史 第十巻

新修大阪府史 第5巻

大阪府史史料 第三十・三十一輯(大阪

市史編纂所)

羽曳野資料叢書 第三回

箕面市地域史料集 二

大谷女子大学資料館報告書 第24・25冊

藤井寺市文化財 第十二号

泉南市文化財調査報告書 第22集

兵庫県史 史料編中世五

相生市史 第7巻

(兵庫県) 出石町史 第二巻

(岡山県) 吉井町史 第二巻

広島県移住史 資料編

古文書調査記録 第十六集(福山城博物

館友の会)

広島県立文書館資料集 1

(山口県) 田布施町史

岩邑年代記(三)(岩国徴古館)

香川県史 別編Ⅱ

香川県歴史の道調査報告書 第四・五集・

第六集の(一)・(二)(瀬戸内海歴史民俗資

料館)

中村平左衛門日記 第八巻(北九州市立

歴史民俗博物館)

佐賀県教育史 第四巻

直方市文化財調査報告書 第12集

(熊本県) 益城町史 通史編・史料民俗

編

大分県史 現代篇Ⅱ・方言篇

宮崎県文化財調査報告書 第34集

(宮崎県) 田野町文化財調査報告書 第

6・7・9・10集

奄美史料 21(鹿児島県立図書館奄美分

館)

宇治家文書目録(鶴岡市立図書館)

山形県内出版物目録(一九八九・一〇一

九九〇・八)(山形県立図書館)

埼玉県行政文書件名目録 土木編(埼玉

県立文書館)

郷土資料目録(大宮市立図書館)

石川家・守屋家文書目録(大宮市秘書企

画室統計資料課)

旧索引継書目録(国立国会図書館図書部)

塩業関係資料目録 第9・10・11集

(日本たばこ産業株式会社塩専売事業

本部)

塩業関係資料目録 別冊(42)・(44)

(45)(同右)

(以下次号)

# 集 報

## ○史料の収集

本年度のマイクロフィルムによる史料収集は、美作国津山松平家文書、美濃国大野郡高山町高山町会所文書、肥後国天草木山家文書について実施した。

(うち松平家文書は「特別研究近世史料の古文書学的研究」による)。各文書の概要については本号「新収史料紹介」を参照されたい。

## ○史料の所在調査

本年度は、出羽国秋田郡久保田町那波家文書、松江藩郡奉行文書(伝「御徒文書」)について実施した。那波家文書については五四号の、松江藩郡奉行文書については、本号「史料所在調査報告」を参照されたい。

## ○史料保存機関連絡および調査

次の機関を対象に調査を実施した。佐賀県立図書館・同県立博物館・福岡県立図書館(二月五日・七日、深川美枝子、富山県立公文書館・神戸市立文書館(二月二六日・二八日、林宏保) 栃木県立公文書館(三月二六日、深川美枝子・林宏保)

## ○評議員会と運営協議会の開催

平成四年二月二四日に運営協議会、同三月一九日に評議員会がそれぞれ開

催され、教官人事、管理運営、次年度事業計画等について協議ないし評議された。

## ○史料館創立四十周年記念祝賀会の開催

平成三年十二月七日に、史料館創立四十周年記念祝賀会が開催された。概要については本号参照。

## ○日歴協特別委員会の開催

三月一三日国立史料館特別委員会と史料保存特別委員会との合同委員会が当館で開催され、吉原健一郎委員長はじめ八名の委員が出席し、史料館員とも懇談した。

## ○出版物の刊行

1 史料館創立四十周年記念出版物として、「史料館の歩み 四十年」、「近世・近代史料目録総覧」を刊行した。『近世・近代史料目録総覧』については、本号参照。

2 定期刊行物としては、「陸奥国白河郡踏瀬村筋内家文書目録」(その二)を「史料館所蔵史料目録」第五五集として、武蔵国大里郡大麻生村古沢家文書目録(その一)を、同じく第五六集としてを、「日本実業史博物館旧蔵古紙幣目録」を第五七集としてそれぞれ刊行した。

## 3 「史料館研究紀要」第二三号を刊行した。

内容は次の通りである。交流する伝説―豊後の真野長者伝説か

ら奥州の白鳥伝説へ― 平川 新  
「御用留」の性格と内容(四)―武州荏原郡上野毛村「御用留」の検討― 森 安彦

上野国寛文郷帳諸写本の検討 丑木幸男

近世文書論序説(中)―近世文書の特質とその歴史的背景について― 大藤 修

近世社会における文書管理と文書認識―美濃国加茂郡峰屋村を事例として― 大友一雄

中国におけるアーキビストの教育と養成―ICA国際シンポジウムの報告を中心に― 安藤正人

4 「史料館報」第五六号(本号)を刊行。なお、次号は本年九月刊行予定。

○文部省科学研究費補助金の交付  
一般研究A「史料所在情報の集約とその解析的研究」(代表森安彦)に四年計画のうちの二年目として、五〇〇万円が交付された。

○平成三年度史料管理学研修会修了証書の授与

所定の教科目を履修し、レポート審査に合格した次の方々には修了証書を授与した。

A長期研修過程修了者氏名 所属 レポート題名

(1)秋山俱子(日本女子大学成瀬記念館)

大学史資料保存の現状とその将来を考える―日本女子大学の場合―  
(2)伊藤克江(富山大学大学院) 城端別院善徳寺文書の整理・保存について

(3)木村立彦(所沢市史編さん室) 写真史料取り扱いの現状と問題点―所沢市史編さん室及び交通博物館・小平市立図書館を例に―

(4)金原祐樹(徳島県立文書館) 徳島県立文書館のデータベース

(5)栗山義久(南山大学図書館) 機械化検索の問題点とその課題について

(6)高橋寛(千葉県立文書館) 文書館における展示活動―千葉県立文書館企画展を事例として―

(7)野見(鎌ヶ谷市郷土資料館) 区有文書の管理と構造について―千葉県茂原市「法目郷有文書」を事例として―

(8)中山文人(松戸市教育委員会美術館 準備室・博物館担当) 社会教育機関における情報サービス―(仮称)松戸市立郷土博物館における情報管理システムについて―

(9)藤田正(中央大学史編纂課) 中央大学総合資料館の設立に向けて

(10)細井守(藤沢市文書館) 藤沢市永年保存文書にみる行政文書の史料学的検討

(11)前田慈子(京都府立総合資料館)

総合資料館におけるマイクロ収集の現状と課題

B 短期研修過程修了者氏名 所属 レポート題名

(1) 内山真理子 (花王株式会社社史編纂室) 企業に於ける資料管理について

(2) 狩野俊明 (大阪府公文書館) 大阪府における公文書館のあり方

(3) 石田泰弘 (佐織町教育委員会) 史料保存利用施設を持たない地方自治体における史料管理について—愛知県海部郡佐織町の場合—

(4) 石田弘幸 (静岡県教育委員会) 史料管理と史料活用・情報サービスについて

(5) 佐々木悟 (秋田県総務部文書広報課) 公文書館制度における課題

(6) 寺西英二 (名古屋市政資料館) 公文書館資料の閲覧利用と公務員の守秘義務について

(7) 岡部真二 (牛久市役所市史編さん室) 現地調査における史料整理の方法について—原秩序尊重・段階的整理の実践報告—

(8) 生田享子 (学習院大学史料館) 史料保存への第一歩—学習院大学史料館での試行錯誤—

(9) 榎本洋介 (札幌市教育委員会) 所蔵文書の検索と文書館の役割について

(10) 山本昇三 (北海道住宅都市部工営課)

アーキビストについて

(11) 吉田千絵 (北海道石狩支庁) 北海道の文書保存のあり方について

(12) 佐藤有紹 (釧路市役所) 史料論の視点からみた蝦夷地厚岸国泰寺文書

(13) 鶴原美恵子 (北海道立文書館) 場所請負制度下における行政文書の保存形態について

(14) 中村純一 (北海道立文書館) 北海道内私文書発掘調査についての考察—特に町(村)史編纂事業と史料保存とのかかわりについて—

(15) 金田文男 (新潟県教育庁) 歴史資料と民俗資料の活用

○平成四年度史料管理学会の開催予定

平成四年度の史料管理学会は次の通り開催を予定している。追って募集要項を関係機関に配布する。

A 長期研修過程 会場、国文学研究資料館 前期 七月六日～八月一日

後期 八月三十一日～九月二六日(前後期とも最後の一週間は研修レポートの作成にあてる)。募集人員三五名。ただし、半期づつ二年度に分けて履修することも認める。

B 短期研修 会場 徳島市 千秋閣

十一月一日～十一月二八日(最後の二週間は研修レポートの作成にあてる)。募集人員三五名。

なお、研修レポートの作成は長期・短期ともそれぞれの自宅ないし職場において作成してもよいものとする。

○来訪者・見学者(海外)

平成四年一月九日、ホーチミン市第二文書保存センター館長 ファン・ディン・ニャム氏

○史料館員研究・教育活動一覽(平成三年発表のもの。ただし、大学出講は平成三年度)

① 森 安彦

・監修・共編著『世田谷区教育史』資料編四(世田谷区教育委員会)

・共編著『世田谷区史料叢書』第六卷(同前)

・共著『所沢市史』(所沢市)

・共著『叢書2(産む・育てる・教える) 家族—自立と転生—』(藤原書店)

・編著『古文書への招待—江戸時代の村の庶民生活—』(NHK教育テレビ短編集)

・論文『御用留』の性格と内容(三)―武州荏原郡上野毛村「御用留」の検討―(『史料館研究紀要』二二二号)

・論文『江戸を生きた庶民の一生』その一―その三(月刊 遠州) 平成三年八月～十月号、につかん書房)

・論文『武蔵野新田開発人の動向—享保期武蔵国多摩郡野中新田の事例—』(『古文書通信』第九号、NHK学園)

・論文『武蔵野風土記』第一回/第三回『季刊武蔵野』第一五/第一七号、武蔵野市)

・講義『古文書の収集・整理』(於、国立公文書館主催、第四回公文書館等職員研修会)

・講演『文化文政期の所沢』(埼玉県所沢市公民館歴史講座)

・講演『江戸時代の村の女性の一生』(埼玉県三芳町立歴史民俗資料館特別展記念講演)

・講演『享保期、武蔵野新田の開発』(小平市文化財講座)

・報告『アジア・オセアニアにおけるアーキビスト養成国際シンポジウム参加報告』(於、全史料協関東支部会月例研究会)

・大学出講 一橋大学 古文書

② 丑 木 幸 男

・共著『渋川市誌』第三卷通史編下(近代現代) 渋川市

・編著『上野国郡村誌』一八卷(総索引) 群馬県文化事業振興会

・監修『笠懸村誌』別巻四近代現代資料集 群馬県新田郡笠懸町

・論文『産業の発達と民家』(『玉村町誌』別巻三) 群馬県佐波郡玉村町

・論文『群馬県地方史研究の動向』(『信濃』第四九八号) 信濃史学会

・大学出講 群馬大学教育学部 日本近

代史特講

③大藤 修

・講演「近世文書の保存と地域文書館」  
（於、神奈川県庁）

・報告「近世の親と子」（於、第一九回比較家族史学会大会）

・報告「近世農民の家と村」（於、日本農業研究所主催「家族と農業」研究会）

・共編著「小山町史」第二巻・近世資料編一（静岡県小山町役場）

・論文「近世文書論序説」上（『史料館研究紀要』第二二号）

・研究ノート「近世の老人扶養の仕組み」（『建築雑誌』第一三一九号）

・紹介「二宮尊徳関係資料図鑑」（『日本歴史』第五二二号）

・分担執筆「一九九〇年の歴史学界―回顧と展望「近世」（『史学雑誌』第一〇〇編第五号）

④安 藤 正 人  
・講演「記録文化財の保存と文書館」  
（於、埼玉県立文書館文書史料取扱い講習会）

・講演「専門職としてのアーキビストをどう育てるか」（於、企業史料協議会史料管理研究会）

・講演「文書館とアーキビスト」（於、東京学芸大学図書館司書課程特別講義）

・報告「Archival Training in Japan」（於、ICA主催アジア・オセアニア

におけるアーキビスト養成国際シンポジウム、於、北京）

・講演「記録遺産の保存と文書館システム」（於、茨城県立歴史館市町村史料保存関係者研修会）

・報告「アジア・オセアニアにおけるアーキビスト養成国際シンポジウム参加報告」（於、全史料協関東部会月例研究会）

・講演「記録史料の整理と保存」（於、南予古文書の会主催記録史料保存に関する講演会）

・講演「近世史料の整理」（於、全史料協研修会）

・編著「越後国頸城郡岩手村佐藤家文書目録（その三）」（国文学研究資料館史料館）

・論文「文書館についての四章」（尼崎市地域研究史料館「地域史研究」第二〇巻第二号）

・論文「記録史料目録論」（『歴史評論』四九七号）

・大学出講 学習院大学博物館学芸員課程 史・資料整理法

⑤山 田 哲 好  
・講演「近世文書の形態とその読解」  
（於、小山市立博物館古文書講習会）

・講演「史料の整理と管理」（於、栃木県立文書館古文書の読み方・扱い方研修会）

・「史料所在情報のデータベース化」  
（『地方史研究』第三〇号）

・「史料館における史料保存活動」  
（『史料館研究紀要』第二二二号・分担執筆）

・「文部省科学研究費補助金の交付と第一回研究会開催報告」（『史料館報』第五四号）

・大学出講 立正大学文学部 古文書学実習 博物館実習

⑥大 友 一 雄  
・共著「所沢市史」上（所沢市役所）

・共著「かわさき文化財読本」（川崎市教育委員会）

・論文「享保期武蔵野新田の社会的地位と民衆意識―その存在の主張―」（『開発』と地域民衆、堆山閣出版）

・講演「享保期の新田開発」（埼玉県所沢市公民館歴史講座）

・報告「近世の由緒書・偽文書の成立とその利用」（全史料協関東部会一月例会）

・大学出講 国学院大学文学部 歴史日本史演習一

⑦渡 邊 尚 志  
・史料館所蔵史料目録第五十四集「陸奥国白河郡踏瀬村筋内家文書目録（その一）」

・「富士見町史」上巻第五編第六章第一・三節、第十四章第二節（一部）

・論文「日本近世における地域」（『歴史科学と教育』一〇）

・書評「畑中敏之著『近世村落社会の身分構造』（部落問題研究 一一二輯）」  
大学出講 東洋大学文学部 国史学演習 国史学特講

⑧渡 辺 浩 一  
・論文「近世社会における（二）撰／仕置像」（『歴史』第七六輯）

・分担執筆「一九九〇年の歴史学界―回顧と展望「近世」（『史学雑誌』第一〇〇編第五号）

・報告「近世城下町研究の現状と課題」（於、都市史研究会第六回例会）

・大学出講 秋草学園短期大学 日本文化史

◎閲覧業務停止のお知らせ

書庫内燻蒸、蔵書点検の実施にともない、左記の期間の閲覧を停止する予定です。お知らせいたします。  
四月二三日（水）、五月二日（土）

史料館報 第五六号

平成四年（一九九二）三月三十一日  
編集兼 国文学研究資料館  
発行者 史料館  
〒一四二東京都品川区豊町一ノ六〇・〇  
電話〇三（三七八五）七一一（代）

印刷所  
東京都台東区寿三ノ一四ノ五  
有限会社 スミダ  
電話〇三（三三八四）二七三三三